

秋田県文化財調査報告書 第307集
払田柵跡調査事務所年報1999

払田柵跡

第115・116次調査概要

2000年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

ほつたのさくあと

弘田柵跡

第115・116次調査概要

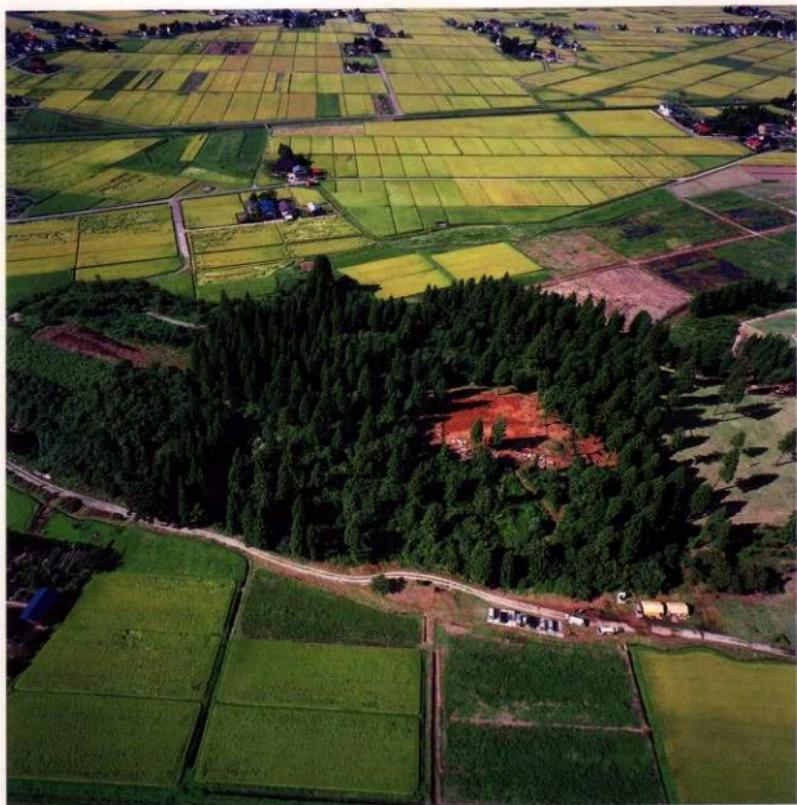
2000年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所



南西上空から観た払田柵跡（長森）

左手前の杉林の中が第115次調査区
中央が整備の進んでいる政庁城



第115・116次調査区全景（南方上空から）

中央が第115次調査区
左端丘陵上が第116次調査区
(巻頭図版1・2とも平成11年9月2日撮影)

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないとこどあります。

平成11年度の調査は、第6次5年計画の初年度にあたり、今まで未着手であった政庁域西側の区域に鍼を入れました。

第115次調査は、政庁西方の推定官衙域の調査で、掘立柱建物跡・板塀跡等の遺構を検出しました。また払田柵跡では、まとまった形では初めてとなる縄文時代の土坑や土器・石器も比較的多く発見されました。さらに第116次調査は、外郭西門東部地域における遺構分布調査を実施しました。

本書は以上のような今年度の調査成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところが大きいと考えますので、ご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体である仙北町、同教育委員会、千畠町教育委員会、ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所長 三浦 隆一

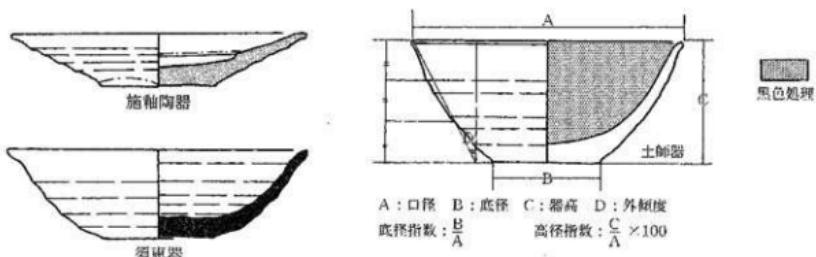
例　　言

- 1 本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成11年度に実施した、払田柵跡の第115次と116次調査の概要報告である。
- 2 調査及び概要報告作成にあたり、当事務所の顧問である秋田大学名誉教授　秋田県立博物館館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名譽教授　東北歴史博物館館長岡田茂弘氏から御指導いただいた。
- 3 遺構等の実測図は国土調査法第X座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれより N 7° 30' 00" W であり、真北は N 0° 10' 58" E である。詳細は払田柵跡調査事務所年報1977『払田柵跡—第11・12次発掘調査概要』（1978年）を参照いただきたい。
- 4 本書の作成・編集は当事務所学芸主事高橋　学が行った。

凡　　例

- 1 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 1997年版』を参考にした。
- 2 本文中における個体数の表記については、坏類では底部が 1 / 2 以上残存するものの個数を数えたものを示す。
- 3 挖立柱建物跡を構成する柱掘形には、北東隅柱より時計回りに各柱穴に P 1, P 2, P 3 … と番号を付し記述する。
- 4 遺構には下記の略記号を使用した。

S B	掘立柱建物跡	S I	竪穴住居跡	S K	土坑	S A	板塀跡
S D	溝跡	S N	焼土遺構	S K I	竪穴状遺構		
- 5 須恵器・土師器・施釉陶器の区別、土師器の黒色処理、坏形七器の計測基準は下図のとおりである。



払田柵跡調査事務所年報1999

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章 はじめに	1
第2章 調査計画と実績	4
第3章 第115次調査の概要	6
第1節 調査経過	6
第2節 検出遺構と遺物	9
第3節 小結	33
第4章 第116次調査の概要	57
第1節 調査経過	57
第2節 検出遺構と遺物	57
第3節 小結	58
第5章 調査成果の普及と関連活動	61

報告書抄録

付図（遺構配置図）

参考図目次

第1図 払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡	第14図 S K1220出土遺物
第2図 払田柵跡調査実施位置図	第15図 S K1221・1257出土遺物
第3図 平成11年度調査区位置図	第16図 調査区東部中央遺構配置図
第4図 基本層序	第17図 S D1231・1250土層断面図
第5図 調査区北西部遺構配置図	第18図 S D1231出土遺物（1）
第6図 S B1219A・B、S B1222A・B柱掘形	第19図 S D1231出土遺物（2）
第7図 S I1229（1）	第20図 調査時代の土坑
第8図 S I1229（2）1230出土遺物	第21図 調査区南縁部で検出の硬質泥岩
第9図 S I1230	第22図 遺構外出土遺物
第10図 S I1236・S K1244（1）	第23図 基本層序
第11図 S I1236・S K1244（2）出土遺物	第24図 遺構配置図
第12図 古代の土坑（1）	第25図 出土遺物
第13図 古代の土坑（2）	

図版目次

- 卷頭図版 1 南西上空から観た払田橋跡（長森） 図版14 SK1220遺物出土状況（東→）
- 卷頭図版 2 第115・116次調査区全景（南方上空から） 同上 土器等出土状況
- 図版 1 第115次全景（西方上空より） 同上 風字観出土状況
- 図版 2 調査区遠景（南東→） 図版15 SK1237・1238土層断面（北西→）
- 調査前状況（南東→） SK1237礫出土状況（北西→）
- 図版 3 調査区全景（写真上が南） SK1239（東→）
- 調査区東部（北→） 図版16 SK1257確認状況（東→）
- 調査区東部（北西→） 同上 土層断面（北→）
- 調査区中央部（北→） 調査風景（南西→）
- 調査区西部（北東→） 図版17 SK1223土層断面（南→）
- 図版 5 SB1219A・B全景（北→） 同上 完掘（南→）
- SB1222A・B全景（北→） SK1246遺物・礫出土状況（南→）
- 図版 6 SB1219-P1（東→） 国版18 SK1233土層断面（東→）
- SB1219-P2（東→） 同上 完掘（東→）
- SB1219-P3（東→） 硬質泥岩分布域内に残る大型の石核
- 図版 7 SB1219-P4（北→） 国版19 SD1231土層断面（南東→）
- SB1219-P5（南→） 同上 遺物出土状況（東側、南東→）
- SB1219-P6（南→） 同上 I Q54における遺物出土状況
- 図版 8 SB1219-P8（西→） 国版20 時期不明の土坑（東→）
- SB1219-P10（西→） 同上 掘り下げ途中（東→）
- SB1219-P11（西→） 同上 完掘（北東→）
- 図版 9 SB1222-P2（東→） 国版21 調査区南東隅部の調査前状況（南→）
- SB1222-P4（北→） 同上 掘り下げ後、上とほぼ同一地点から撮影
- SB1222-P5（西→） 国版22 上：調査区南縁部の硬質泥岩分布域（写真上が南）
- 中：同上 南東部
- 下：同上 調査風景（西→）
- 図版10 上：SI1229全景・遺物出土状況（東→）
- 中：住居北東部の状況（南→）
- 下：須恵器甕破片（実測図は第8図1）
- 図版11 SI1236七層断面（南側、東→） 国版23 出土遺物
- SI1236・SK1244七層断面（東→） 国版24 第116次調査区遠景（南西→）
- SK1244遺物出土状況（東→） 調査区近景（東→） 表層の根等除去後に撮影
- 図版12 SI1236・SK1244全景（北→） 国版25 調査風景（東→）
- SI1236・SK1244全景（東→） 造構検出状況（西→）
- 図版13 SI1236遺物出土状況
- SK1221遺物出土状況（上面）
- 同上（下面）
- 表目次
- 第1表 払田橋跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧
- 第2表 調査計画表
- 第3表 調査実績表

第1章 はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畠町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

1902・3（明治35・36）年の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際に、1906（明治39）年頃から開始された高梨村（現仙北町）耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解されたのが、遺跡解明の端緒となった。1930（昭和5）年3月に至り、後藤宙外が中心となって高梨村が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931（昭和6）年3月30日付で秋田県最初の国指定史跡となり、1988（昭和63）年6月29日付で史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600m²である。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することを目的に1974（昭和49）年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。幸い、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

事務所は1986（昭和61）年4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称し、現在は「払田柵跡調査要項」の第6次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはI～V期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡I－政庁跡－』（昭和60年3月）として公刊した。

一方、区画施設である外柵は東西1,370m、南北780mの長楕円形で、標高32～37m、総延長3,600m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000m²である。外柵は1時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163,000m²、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,760mで石壘・築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭線は全体に4時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、1995（平成7）年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は報告書『払田柵跡II－区画施設－』（平成11年3月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・灰釉陶器などのほか、斎串・曲物・挽物・鍔・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書き器などの文字資料がある。木簡は昨年度までに88点確認しており、「飽海郡少隊長解申請」「大火大糞ニ石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書、貢進用木簡があり、「別當子弟」「狹藻」などの文字もある。墨書き器は370点以上出土・採集されており、「大津郷」「鷹空

上」「櫻梅」「小勝」「音丸」「厨家」「厨」「宮」「舍」「館」「千」「主」「長」「酒」などの文字がある。

管理団体仙北町は、1979（昭和54）年から保存管理計画による造構保護整備地区的土地買い上げ事業をすすめており、1982（昭和57）年からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに1991（平成3）年からは「ふるさと歴史の広場」事業により、外堀南門や大路東建物、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田櫛総合案内所）の設置などを実施し、更に1995（平成7）年からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物の整備などを実施した。本年度は外郭西門の門柱及びこれに取り付く材木塀の復元整備を行っている。

なお、平成10年度までに実施した過去25年間の発掘調査面積は42,138m²であり、遺跡総面積のうちの4.8%にあたる。

第1表 扉田櫛跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧

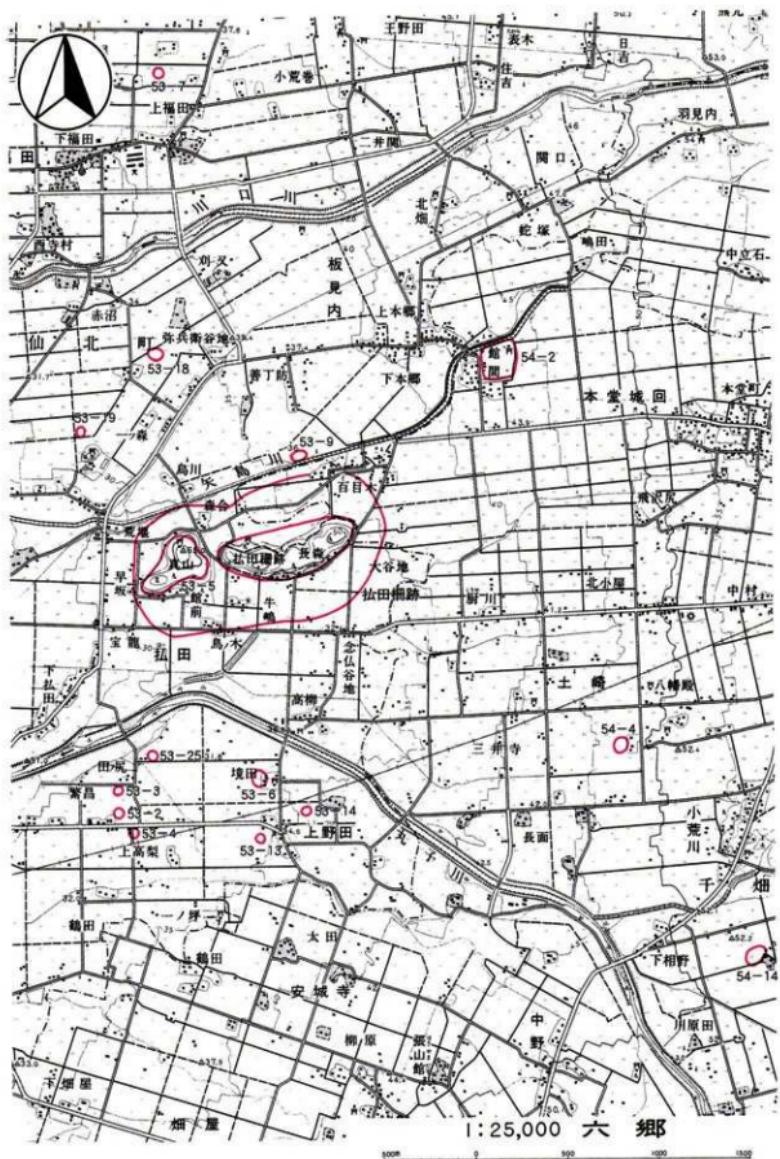
地図番号	遺跡名	所在地	備考	文献
53-2	繁昌Ⅰ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
53-3	繁昌Ⅱ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-4	上高梨遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（須恵器）	1
53-5	堀田城跡	仙北町払田	真山を利用した中世城館	2
53-6	境田城跡	仙北町払田	中世城館：天正18年破却	2
53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	仙北町横堀	遺物包含地（須恵器）	1
53-9	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-13	四十八遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-14	中村遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器）	1
53-19	一ツ森遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（株洲系陶器）	1
53-25	田ノ尻遺跡	仙北町払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
54-2	本堂城跡	千畠町本堂城回	中世城館：戦国期本堂氏の居館	2
54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	千畠町土崎	寺院跡	1
54-14	内村遺跡	千畠町千屋	平安時代集落跡、1980年発掘調査	3

文献1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62）年

2 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56）年

3 秋田県教育委員会『内村遺跡』1981（昭和56）年

*地図番号は、文献1の地図番号に対応する



第1図 払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第2章 調査計画と実績

平成11年度の調査は「払田柵跡調査要項」に基づく、第6次5年計画の初年度に当たる。事業費については、国庫補助金の内示（総経費1,600万円のうち、国庫補助金800万円）を得たので、次のような「平成11年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第2表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間
第115次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	政庁西方の推定官衙域の調査	1,000m ²	4月20日～ 8月31日
第116次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域の遺構分布調査	300m ²	9月1日～ 9月30日
合計	2地区		1,300m ²	

平成11年度から15年度の調査は、「払田柵跡発掘調査第6次5年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て承認されたものである。

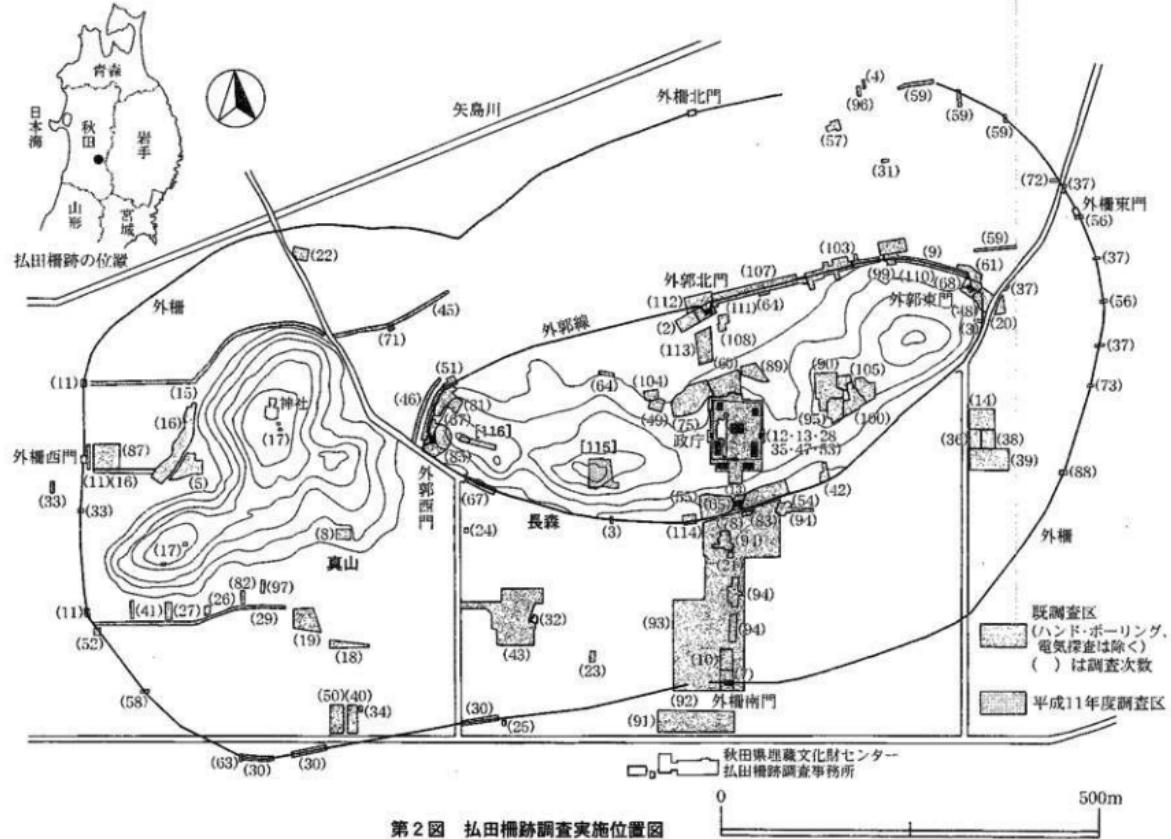
第115次調査は、政庁域西方の推定官衙域の調査である。政庁の西側に広がる平坦地には掘立柱建物、竪穴住居などからなる官衙域の存在が推定されるが、今まで全く未調査であった。政庁東方地域での調査を踏まえ、政庁を中心とする東西両側の遺構群のあり方と、その変遷を明らかにするため、この地域の調査を実施することにしたものである。

第116次調査は、外郭西門東部地域の遺構分布確認調査である。外郭西門の東側地域には平坦地は少ないが、政庁に連なる道路や、それに伴う遺構の存在が考えられる。外郭西門の整備に合わせ、西門と政庁を結ぶ地域の遺構確認の調査を行うことにしたものである。

平成11年度の調査の実績は第3表のとおりである。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間
第115次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	政庁西方の推定官衙域の調査	1,240m ²	4月19日～ 10月22日
第116次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域の遺構分布調査	350m ²	8月26日～ 10月19日
合計	2地区		1,590m ²	



第2図 弘田柵跡調査実施位置図

第3章 第115次調査の概要

第1節 調査経過

本年度より始まる第6次5年計画は、主に長森丘陵部を対象としている。この区域の多くは今まで調査の手が及んでいない所であり、第115次では政庁西側で最も高位で平坦な箇所を設定し、調査を行うことにした。以下では調査日誌よりその経過を抜粋する。

調査は4月19日に開始した。現況が樹齢30~50年の杉林と雜木林であり、この林の中に調査区を設定する作業から取りかかった。21日、設定した調査範囲内に杉木が10数本あることが判明した。その他にも倒木が數本あり、これらの処理をどのようにするのか検討に入る。5月6日、これらの杉木は仙北町の町有財産であるため、同日付けで仙北町長宛の伐採・搬出の許可願いの文書を作成する。

5月10日、本日より調査作業員を動員しての調査に入る。まず長森南側低地にテント2張りを設営する。作業員休憩用と器材保管用である。12日より杉木伐採作業が委託で行われる。14日午前で雑木・倒木を含めた材の搬出作業が終了する。17日より表土除去（粗掘り）に入る。18日、この頃田植えの最盛期である。24日、表土下15cm程で遺構が見つかり始める。31日、粗掘りは全体の半分終了、北側ほど表土が薄い。

6月1日、調査区北西部では表土下10cmで遺構確認面となる箇所もある。土坑・溝跡（後日、板塙跡と判明）を複数確認する。石礫・剥片も出土。2日、調査区南端部の窪みは「石墨石材採掘坑」ではないかと推定する（後日、土坑とする）。これらの現況での写真撮影を実施する。3日、当初予定していた箇所の粗掘りはほぼ完了する。南端部では基盤層である硬質泥岩が僅かに顔を覗かせていたが、表土を除去すると予想以上に大きな岩も存在することと、石核を含む遺物も出土することから、この区域（以下、硬質泥岩分布域とする）も精査対象にすることとした。9日、硬質泥岩分布域の写真撮影を行う。16日から調査区内に平面図実測のための方眼杭を打設する。18日、SK1217表土より寛水通竇1枚採集。21日、遺構確認のジョレンがけて住居跡らしき方形のプランを2箇所で確認する。測量杭打設はほぼ終了する。22日、調査区周辺の草刈りを行う。28日、昨日までの雨でジョレンがけには最適の状況となり、調査区北西部で2×3間以上（後日2×4間と判明）の掘立柱建物跡SB1219を確認する。29日、遺構を確認した箇所については、乾燥を防ぐためにシートを掛ける（写真1参照）。

7月1日、調査区中央で東西に延びる溝跡SD1231は、政庁から外郭西門に至る道路跡ではないかとの予測をもつ。土坑SK1220には土師器壊が10個体以上ありそうである。9日、本日の出土遺物は、全て縄文土器・石器である。払田柵跡でこれだけの縄文が出たことはあるのだろうか。12日、遺構精査に先立ち遺構に隣接する杉木切株の除去作業に入る。伐根は15日でほぼ終了する。

7月22日、本日より本格的に遺構精査（掘り下げ）を取りかかる。SB1219の柱掘形は1つだが、アシリは2つになりそう。27日、大曲での最高気温が36℃を記録、観測史上2番目とか。30日、竪穴住居跡2軒、掘り下げ開始、SI1229では火山灰がブロック状に確認される。

8月2日、溝跡SD1231掘り下げ開始、直ぐに底面に至る箇所あり、ここでも火山灰が見つかる。この溝跡も明らかに古代のものであることが確かめられた。5日、本日で小柱穴を含めた遺構の確認作業をほぼ終了する。これからは掘り下げと図面作成に専念する。9日、15日間連続の真夏日となる。作業の進行状況は芳しくないが、この天気ではしょうがない。

8月18日、お盆休み明け初日、まだあつい。25日、調査区周辺の草刈りを実施する。26日、本日より遺構平面図作成に入るため、図面担当以外の作業員が第116次の粗掘りを開始する。

9月2日、硬質泥岩分布域の大量の岩等を図化するため、委託でラジコンヘリを飛ばす。併せて遺跡・調査区の全景写真撮影を行う。3日、SB1219は全ての柱掘形が2時間であることがようやく確認される。7日、調査区北東部で柱穴が径6m程の半円を描くよう見える。縄文前期の窓穴住居跡になるものか、遺物がなく詳細不明である。

16日、払田柵跡地内の稻刈りが始まる。20日より10月1日まで、秋田県埋蔵文化財センターに研修で来秋中の中国甘肃省博物館歴史考古部の賈建威氏が払田柵跡の調査に加わる。遺構精査・図面作成を手伝っていただく（写真2・3）。

10月4日、全景写真撮影のため、調査区全体の清掃に入る。6日、全景写真撮影実施する。13日、第49回顧問会議が調査現場及び秋田県埋蔵文化財センターを会場に開催される。14日、実測図の補足を行い、図面作成作業は完了となる。18日より人力による埋め戻しに入る。21日からは重機による埋め戻し（委託）が始まると、テントを覺み22日に野外調査を終了した。



第3図 平成11年度調査区位置図



第2節 検出遺構と遺物

1 調査区の立地と基本層序

第115次調査区は政府の西約150mに位置し、長森丘陵地西部では最も高位となる平坦地にある。標高は50~51mであり、政府域の標高が42mであることから、ここを見下ろすような位置関係となる。現況は杉林・雜木林である。

調査区の基本層序は、調査区北壁中央部、SK1220の北側で観察した。

第I層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）表土、観察地点での層厚は10cmであるが、南側では15~20cmである。

第II層：暗褐色土（10YR3/3~3/4）部分的に炭化物が混入する。縄文土器・土師器等を含有するが、包含層と呼べるほどの遺物量はない。層厚5~15cm。

第III層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）~褐色土（10YR4/4）地山漸移層、層厚10cm前後。

第IV層：褐色土（10YR4/4~4/6）地山層、観察地点は単純な粘質土であるが、南部に移行するにつれ、基盤の硬質泥岩が混じる礫混入の粘質土の様相を呈する箇所や、南端部では人頭大から長径が1mを超すような巨礫が露出する所もある。

2 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡3軒、土坑27基、板塀跡5列、溝跡4条、焼土遺構2基、柱穴状ビット約880基である。これら遺構の構築時期は、その確認面・出土遺物・堆積土等の観察から判断すると、大きく古代と縄文時代に分けられる。また時期不明の遺構も存在する。以下では、検出遺構とその出土遺物を3期に分けて概要を報告する。なお今次調査で付した遺構番号は、1217~1260まであり、欠番もある。

（1）古代

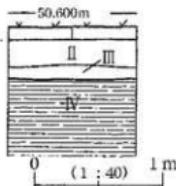
該期の遺構は、掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡3軒、土坑20基、板塀跡5列、溝跡4条である。なお柱穴状ビットは、古代あるいは後述の縄文時代に属するものが混在する。これは出土遺物から予測されたが、大部分は古代の可能性はあるものの時期不明と言わざるを得ない。

①掘立柱建物跡

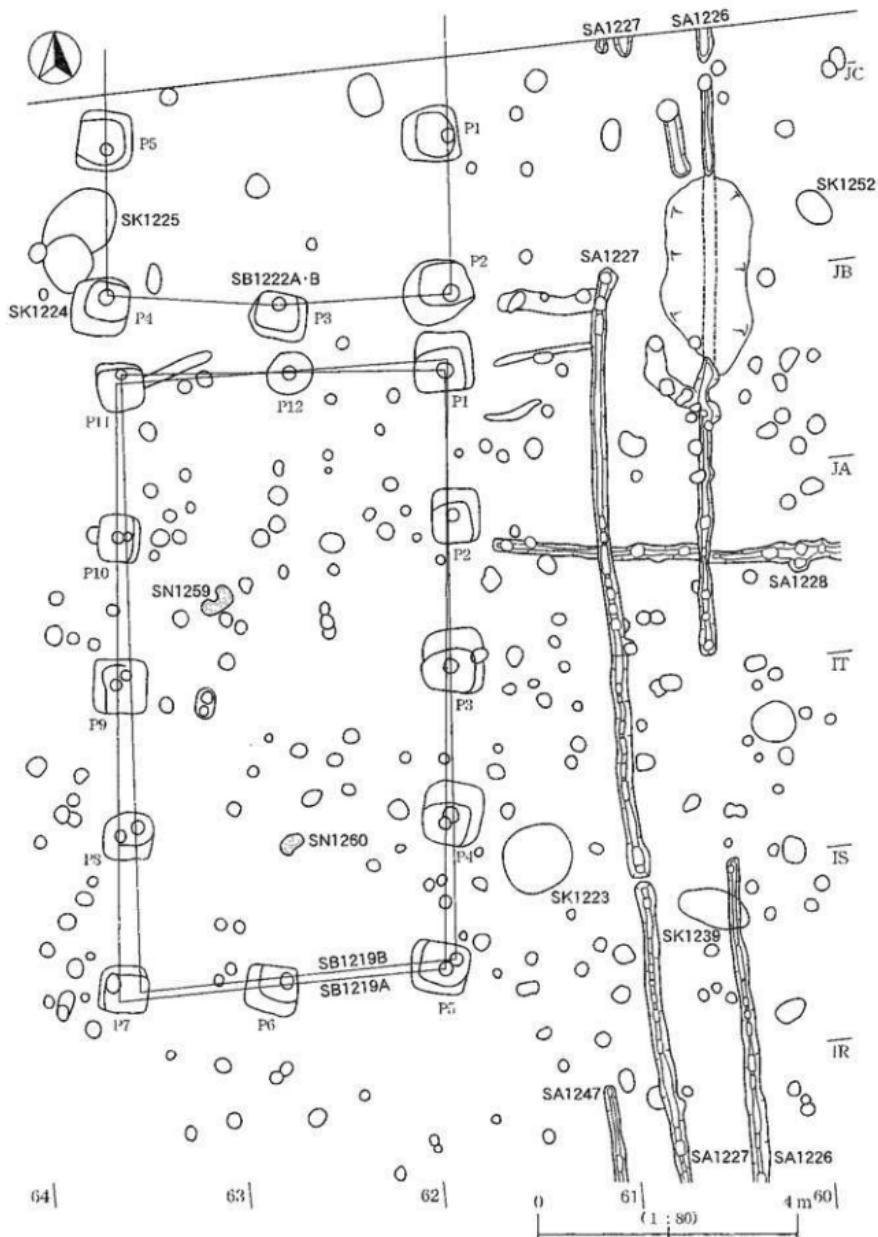
S B1219A・B（第5・6図、図版5~8）

調査区北西部で検出した桁行4間×梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。平面・断面観察により柱掘形は2時期の重複が認められた。旧期（A）での柱掘形は一辺が70~90cmの整った隅丸方形を示す。新期（B）はA期内の南側あるいは東側にややすれるが、A期の柱掘形を大きく拡張するものではなく、一辺・長軸を65~70cmに縮小し、形状は隅丸方形から稍円・不整円に近くなる。なお北側梁行中央の柱掘形（P12）のみ径70cm程の円形を呈しており、ここでは柱掘形自体の重複は見られない。またP10B期の柱掘形はA期の東にややすらして構築される。

各柱掘形は確認面より26~43cmの深さをもち、A期ではほぼ垂直に掘り込まれるが、B期ではその

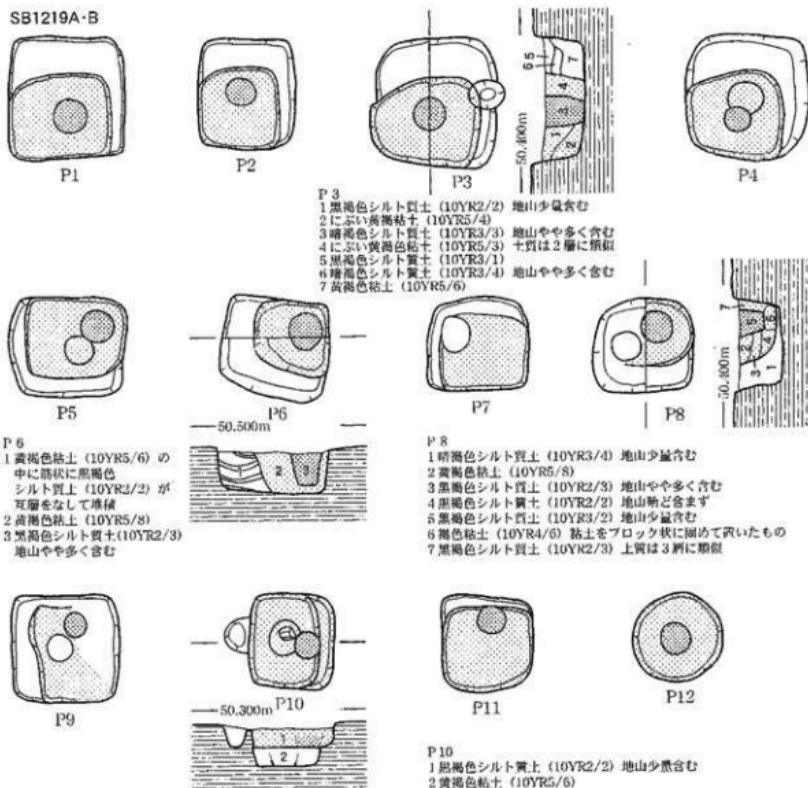


第4図 基本層序

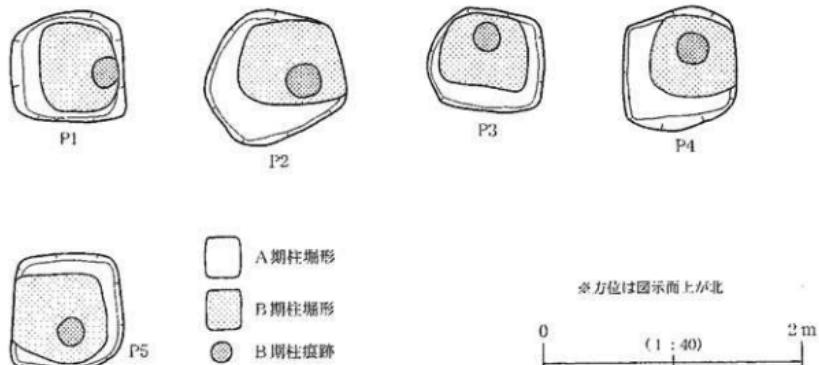


第5図 調査区北西部遺構配置図

SB1219A・B



SB1222A・B



第6図 SB1219A・B、SB1222A・B柱掘形

立ち上がりが傾斜をもつ。埋土は2期とも地山土に近い黄褐色粘土を主とするものや地山粘土の混入の少ない黒褐色シルト質土が充填されるものなど柱掘形によりバラエティーに富むが、粘質土とシルト質土が互層となるものはA期柱掘形のうちの1基のみ（P 6）である。

柱痕跡はその掘形自体がほぼ同一箇所で重複することから、A期についてはほとんど確認できなかった。しかしながら、柱掘形中央底面に円形（径25cm前後）の硬化面として検出できた例もある。P 10では、A期柱掘形底面から15cm前後上位にB期柱掘形が構築されており、一部残るA期柱掘形内において柱痕跡を土層観察では把握できなかったが、硬化面により柱位置を推定できた。B期柱痕跡は、その底面レベルがP 10以外にもA期柱掘形底面から10cm前後浅く（高く）位置するものがあり、P 8では粘土によるかさ上げ（土層断面6層）を行っている。また前述のP 12柱掘形は、まさに底面レベルが異なる2本の柱痕跡が平面的には同一箇所で確認でき、柱掘形自体の重複はないものの、2時期と判断されたものである。なおP 7は、平面的に柱痕跡を確認できず、図示している柱穴プランはB期柱掘形を切る新しい時期の柱穴である。

S B1219建物跡の規模は、柱痕跡が明確でない箇所もあり断定はできないが、第5図に示したラインでの数値は次のようになる。A期では、東側桁行柱間総長9.4m（北から2.4+2.3+2.4+2.3）、西側桁行柱間総長9.5m（北から2.3+2.3+2.3+2.6）、北側梁行柱間総長は5.2m（東から2.5+2.7）、南側梁行柱間総長は5.0mとなる。B期では、東側桁行柱間総長9.1m（北から2.25+2.3+2.3+2.25）、西側桁行柱間総長9.5m（北から2.55+2.05+2.35+2.55）、北側梁行柱間総長は5.0m（東から2.4+2.6）、南側梁行柱間総長は4.9m（東から2.65+2.25）となる。

出土遺物は、P 4とした柱掘形確認面上から土師器壺破片が数点確認できたのみである。

なお建物柱掘形の深さ（26～43cm）は、その平面規模（一辺65～90cm）と比較して浅い。これに後述するS I 1230竪穴住居跡の遺構確認状況や現況地形などを勘案すると、柱掘形の確認面（すなわち地山面）は、古代以降に削平・整地された面であった可能性が高い。従って建物で囲まれた内部の地山面上で検出した2箇所の焼土遺構（SN1259・1260）は、古代に帰属する施設ではなく、それ以前の縄文時代に帰する遺構となるものと判断される。焼土遺構については、縄文時代の項で紹介する。

S B1222A・B（第5・6図、図版5・9）

S B1219北側に隣接し、桁行2間以上×梁行2間の南北棟となる掘立柱建物跡であろう。軸線方向はS B1219とはほぼ同一となる。柱掘形は平面観察により2時期の重複が明瞭に認められた。旧期（A）では一辺が90～110cmの隅丸方形を示すが、S B1219 Aのような整った形を呈してはいない。新期（B）は旧期の東・北側にややずれ、一辺の軸が65～80cmに縮小し、その形状も梢円に近くなる。確認面からの深さは40cm程度で、ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦となる。埋土は黒褐色～暗褐色シルト質土を主とするもので、粘質土の混入は多くなく、B期柱掘形のうち、P 2上面には十和田a火山灰と思われる堆積物が見られる。B期柱掘形には径20～25cm柱痕跡が認められ、これによると梁行柱間総長は5.3m（東から2.6+2.7）となり、桁行の柱間は東側で2.5m、西側で2.3mである。

遺物はP 2（B期柱掘形）から土師器壺1点、P 5柱掘形確認面上より土師器壺・壺破片が3点出土している。

①竪穴住居跡

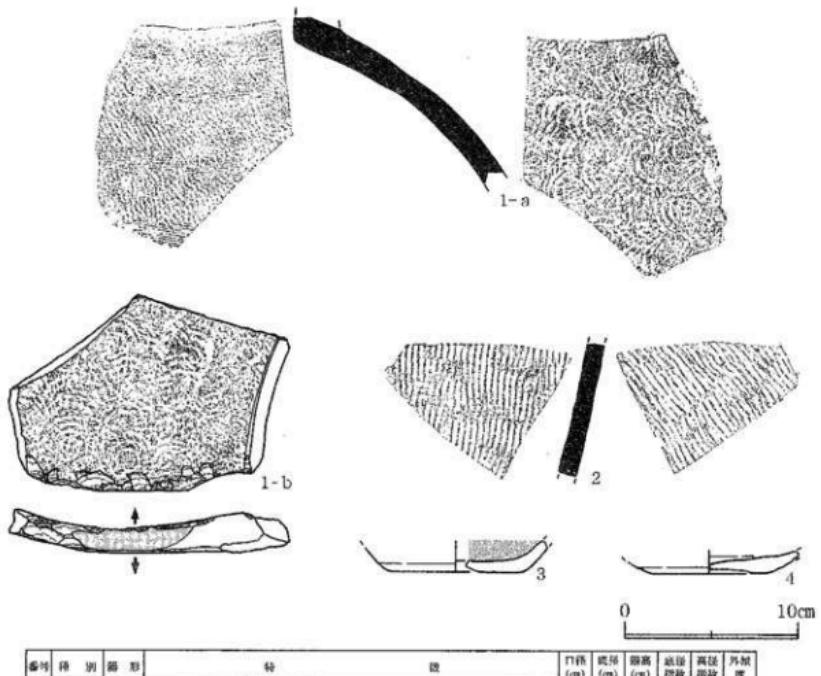
S I 1229（第7・8図、図版10）



第7図 S I 1229 (1)

調査区中央南部、I N59を中心とする地区で検出した。規模は東西4.1m×南北3.9mで隅丸方形を呈する。主軸方向はほぼ東一西を向く。確認面から床面まではやや緩やかに傾斜しながら下り、その深さは22~26cmである。東壁中央やや南側では、壁が内側に張り出す箇所が見られる。これは地山を長さ80cm×幅20cm程の台形状に掘り残したもので、横断面が段状となる。位置・形態的には出入口施設であったと考えることができる。堆積土は1~5層に分けられ、床面直上(3・4層の最下部)では少量ながら火山灰がブロック状に確認された。床面直上北側に分布する5層は地山土で、人為的に埋められた様を呈している。平坦で堅く締まる床面上には基本的に4本の柱穴が位置するものと思われるが、南東部のみ不明確である。各柱穴は径15~20cm、床面からの深さは5~16cmである。

また、床面中央から北東部寄りには長さ65cm、幅60cm程(深さ5~10cm)の略円形の土坑が掘り込まれる。これは住居に附属するもので、周壁の一部が焼けており、埋土に多量の焼土・炭化物が含まれることから鋳造等の火の使用を伴う施設と見ることができよう。一方床面中央部には長さ70cm、幅



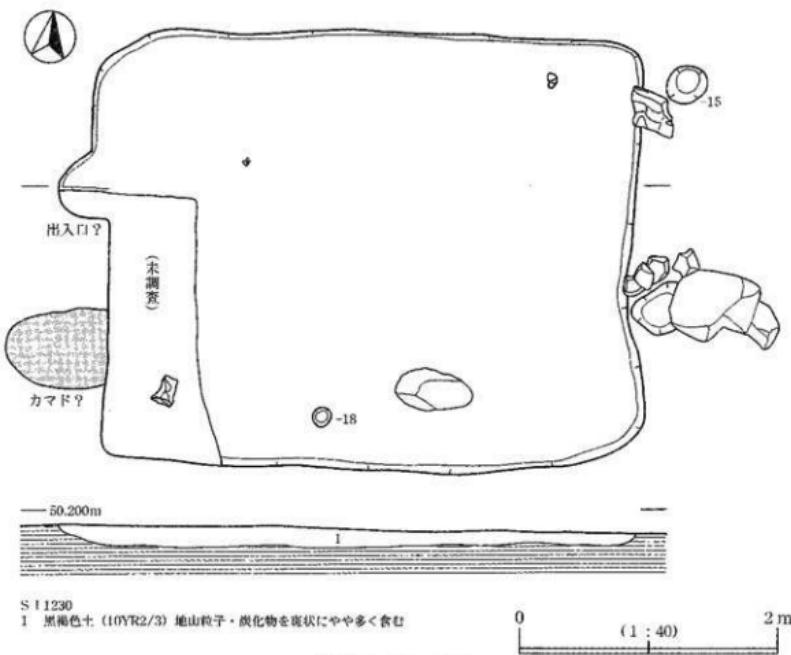
番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	底盤 形状	裏面 形状	外周 形状
1	須恵器	甕	外: 平行叩き→ロクロ・輪焼、内: 古渦波当て舟、工具に使用	-	-	-	-	-	-
2	土師器	甕	外: 平行叩き、内: 平打当て舟	-	-	-	-	-	-
3	土師器	杯	外: ロクロ・輪焼、内: ロクロ→ミガキ→黑色処理、底、内側布切り	-	7.6	(1.8)	-	-	-
4	土師器	杯	内外: ロクロ・輪焼、底: 輪鉢名切り	-	7.0	(1.5)	-	-	-

第8図 S11229(2)・S1230出土遺物

20~30cmの不整形の硬化面が存在し、周囲の床面とは比べものにならないくらい固結しており、色調も暗赤褐色 (SYR3/4~3/6) を示している。これも先の土坑と関連する火を使用した作業面であると考えられる。以上の点と、カマドが認められないと考え合わせると、本住居は火を使用する何らかの工房跡だったと推測される。ただ周辺埋土は篠掛けや磁着作業した結果では、鍛造剥片等の鉄片は発見できず、鍛冶に関連するかと断定することはできなかった。

出土遺物は土師器・須恵器・鉄製品・縄文土器・石器があり、小破片が多い。土師器では壺類が少なくとも6個体あり、甕類はごくわずかである。図示しているのは内面が黒色処理される甕(3)である。須恵器では杯1個体、甕2個体(1・2)のみである。鉄製品は釘状を呈する棒状の製品である。縄文土器は3点、石器では剥片・石核が数点、砥石(あるいは台石か)1点を確認している。

第8図1(-a・b)は焼面をもつ土坑北側の床面直上から出土した須恵器大甕の肩部破片である。破片周縁部を観察すると、意図的に打ち欠きされており、b図示面の下辺部(下面の割口)には擦りに伴う平坦面が認められる。この擦りは、図における矢印方向での往復運動により形成されたと考えられ、下端に見られる不整形な剥離痕はこの運動により生じた可能性がある。これは形態的には縄文時



第9図 S.I.1230

代の半円状扁平打製石器（あるいは擦石）に酷似するものであり、出土位置・層位とあわせて推定すると、本施設（工房跡か）の作業に係る何らかの工具として須恵器を再利用したものと見ることができよう。

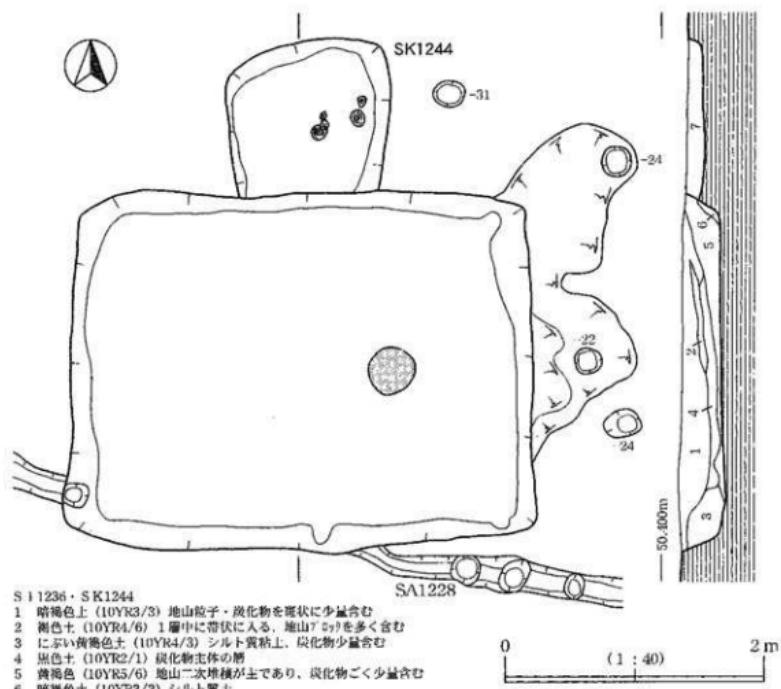
S.I.1230（第8図4、第9図）

調査区南東部、I M55を中心とする地区で検出した。規模は東西4.2m×南北3.4mの隅丸長方形を呈する。住居南側壁外にはこれと近接・並行するように一抱えもある基盤の硬質泥岩が露出している。これに西側壁では南側に長さ80cm×幅62cmの焼土の広がりが、北側には長さ（奥行き）40cm×幅52cmの半円状の張り出しがそれぞれ伴う。前者はカマド、後者は出入口であったと考えられる。なおカマド部分は未調査であり、次年度に精査を予定している。主軸方向はちょうど東-西となる。精査の結果、確認面から下に10cm程掘り込まれるが、ここは凹凸が著しく地山の硬質泥岩が數多く顔を出していることから、この面が床となるのではなく、確認面が床面であり、貼床を掘り下げていたことになる。なお住居内に認められる柱穴は、貼床底面から掘り込まれているもので、確実に住居に伴う柱穴は発見されなかった。

出土遺物には、土師器・縄文土器がある。土師器は壺が主体を占めるが小破片がほとんどである。第8図4に壺を図示する。二次的な被熱により器面の剥落が著しい。縄文土器は2点確認している。

S.I.1236（第10・11図、図版11～13）

調査区中央北部、I T58を中心とする地区で検出した。北側で土坑SK1244を、南側では板塀跡S



第10図 S I 1236・SK 1244 (1)

A1228をそれぞれ切り込んで構築している。規模は東西3.6m×南北2.8mの隅丸長方形を呈する。確認面から床面までは北側で25cm前後、南側では35cm前後の深さをもつ。堆積土は1～6層に分けられ、明確に火山灰を包含する層はない。柱穴は四隅に位置すると思われるが、北西隅部のみ未確認であり、他は径20cm程の規模をもつが床面下に掘り込むものではない。S I 1229同様床面上にはカマドをもたず、中央東寄りに径35cm程（深さ5cm）の土坑が掘り込まれる。この土坑には炭化物が充填され、少暈の焼土も含まれるが、周壁が明確に焼けているとは観察できなかった。

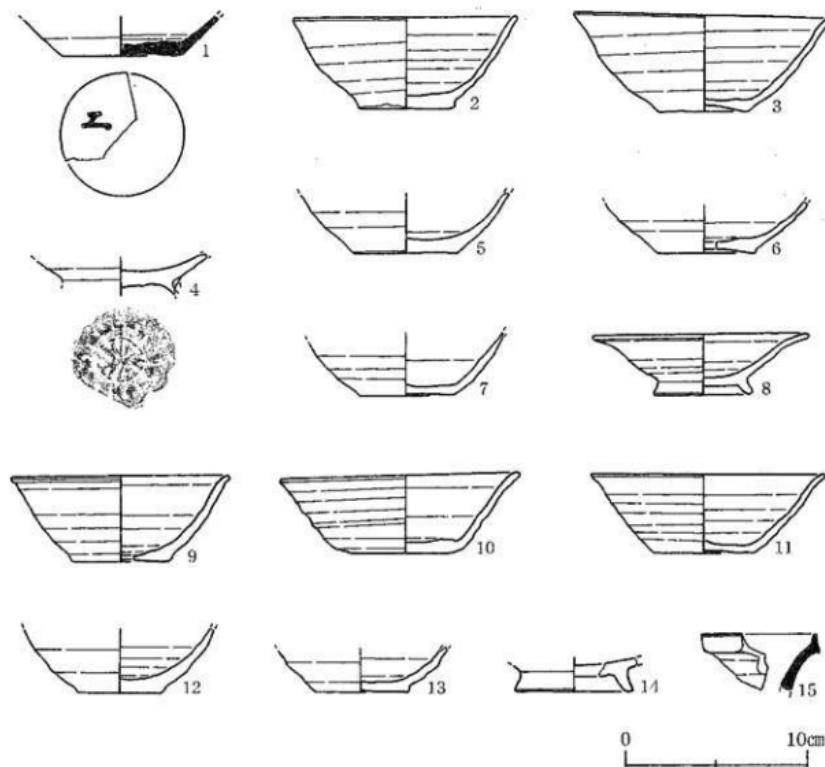
出土遺物は、土師器・須恵器がある。土師器は壺類が主であり、少なくとも20個体は確認できる（2～8）。8は皿状を呈し、4の底部には台部接合・整形時の菊花状のケズリが観察される。2・4・6の3個体には二次的な被熱が認められる。須恵器は壺1個体あるのみである。1は底部に判読しづらいが「工」の墨書きが見られる。

③土坑

土坑は27基確認精査したが、うち20基は古代に帰属すると判断している。

S K 1220 (第12図、図版14)

調査区北部中央、JB 58で検出した。規模は長さ204cm×幅190cmであり、隅丸方形を呈する。遺構確認面は第II層中であり、ここが掘り込み面となりその深さは28cmである。堆積土は1層であり、壁



番号	種別	器形	特 徴	内径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 倍数	高径 倍数	外縁 度
1	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り、底「工」微張		8.6	(2.2)			
2	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り、被熱	12.2	5.3	5.1	0.43	41.8	31°
3	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り	14.1	4.9	5.5	0.35	39	32°
4	土師器	台付环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り→菊花状ケズリ→台付、被熱		6.4				
5	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り		5.6	(3.2)			
6	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り、被熱		5.4	(2.7)			
7	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り		5.1	(3.6)			
8	土師器	台付环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り	11.6	4.9	3.35	0.42	28.9	52°
9	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り、被熱	11.7	5.2	4.7	0.44	40.2	30°
10	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り	12.6	5.5	4.35	0.44	34.5	35°
11	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り	12.9	5.7	4.5	0.44	33.3	35°
12	上部器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り		5.1	(3.5)			
13	上部器	环	内外：ロクロ調整、底：回転条切り		5.1	(2.5)			
14	上部器	台付环	内外：ロクロ調整、底：切り離し不明→台付		5.8	(1.8)			
15	瓦底器	瓦底板	内外：ロクロ調整						

第11図 S11236・SK1244(2) 出土遺物

は底面から極めて緩やかに立ち上がる。底面は堅く縮まっている。

出土遺物は、土師器、須恵質の風字硯、溝文土器・石器（石匙下半部か）がある。土師器は壺類が倒立状態で出土する事例が目立ち、意図的に置いたものと考えられる。その個体数は少なくとも21を数える。この中には漆容器とされたもの（2・4）が含まれる。1は風字硯の右側破片であり、底面には剥落した脚部の痕跡が残る。図示面左側縁（割口）には、S I 1229出土の須恵器甕（第8図1）と同様の擦りに伴う平坦面が観察される。摩耗具合から見ると、本例の使用頻度は壺破片より高かったのかもしれない。また4・7は二次的な被熱が認められる。

S K1221（付図、第15図、図版13）

調査区北東部、I T 55で検出した。表土下の第1層中において遺物（土師器）・炭化物等がまとまって出土した箇所があり、ここを精査した結果、同所下位より浅い皿状の窪みを有する土坑が確認された。平面図は遺物を取り上げた後に作成したものであり、径35cmの円形で深さは僅か5cmであった。しかし遺物が土坑に伴うものと考えられることから、構築時の規模は少なくとも径50cm、深さは25cmを超るものであったと判断される。

遺物は土師器があり、壺類は12個体、甕2個体を確認している。6は皿状を呈する。2の坯体部には判然としないが、「竹」字形の墨書きが見られる。甕は2個体（7・8）とも整形にロクロを使用している。

S K1224（第12図）

調査区北西端部、J B 63で検出した。縄文時代の土坑S K1225を切り、掘立柱建物跡S B1222 P 4、及び径30cmの小柱穴（深さ23cm）に切り込まれる。規模は長さ84cm×幅78cmであり、略円形を呈する。確認面からの深さは30cmである。堆積土は漆黒色土1層である。遺物は出土しなかった。

S K1234（第13図）

調査区北部中央、J B 58で検出した。規模は長さ82cm×幅70cmであり、略円形を呈する。確認面からの深さは36cmであり、壁は皿状に中央部がやや窪む底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は1層であり、土性・混入物から人為堆積の可能性がある。遺物は出土していない。

S K1237（第13図、図版15）

調査区北西端部、J B 63で検出した。S K1238に隣接するが直接の重複はない。規模は長さ86cm×幅70cmであり、梢円形を呈する。確認面からの深さは北側で10cm前後、南側での最深は42cmである。堆積土は3層に分けられる。土坑ほぼ中央には長さ18cm、幅8cm、高さ25cmの板状の礫が直立していた。これは意図的に埋設されたものと思われる。遺物は出土しなかった。

S K1238（第13図、図版15）

調査区北西端部、J A 64で検出した。土坑北部には径38cmの柱穴（深さ34cm）が構築されている。規模は長さ96cm×幅70cmであり、梢円形を呈する。確認面からの深さは28cmで、壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層のみであり、土性・混入物から人為堆積の可能性がある。遺物は出土しなかった。

S K1239（第13図、図版15）

調査区中央部I R 60で検出した。板塀跡S A 1226に東側を切られる。規模は長さ120cm×幅62cmであり、梢円形を呈する。確認面からの深さは西側で10cm、東側ほど浅くなり東端部では僅か4cmとなる。

堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

S K1240 (第12図)

調査区東部中央、I P 55で検出した。規模は長さ200cm×幅160cmであり、不整な楕円形である。確認面からの深さは14cmで、底面は平坦ではなく、緩やかな起伏をもつ。堆積土は2層に分けられ、平面的には確認できなかったが、断面観察では2遺構の重複（2層と3層）であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

S K1241 (第12図)

調査区東部中央、I O 54で検出した。規模は長さ76cm×幅64cmであり、不整円形を呈する。確認面からの深さは12cmであり、底面中央が最深部となる。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

S K1242 (第13図)

調査区北東端部、J B 55で検出した。土坑の南側で長さ44cm×幅34cmの柱穴（深さ66cm）により一部を壊され、明確でない箇所もあるが、その規模は長さ76cm、幅60cm前後の円ないしは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは最深で38cmであり、底面には小さな凹凸が認められる。堆積土は4層に分けられ、土性・混入物から人為堆積と判断している。遺物は出土しなかった。

S K1243A・B (第12図)

調査区北東端部、J B 56で検出した。ほぼ同一箇所で重複しており、旧土坑をS K1243A、新土坑をS K1243Bとする。Aは長さ88cm×幅66cmの隅丸長方形を示し、この中に入り込むようなBは径60cm程の円形を呈する。確認面からの深さは、Aで50cm、Bは23cmである。堆積土はAで4層（2～5層）、Bは1層に分けられる。Aは地山粘土とシルト質土が互層に観察され、人為堆積であることが明らかである。遺物は出土しなかった。

S K1244 (第10・11図、図版11)

調査区中央北部、J A 58で検出したが、S J 1236竪穴住居跡にその南側を破壊されている。従って規模・形態は明瞭ではないが、東西長1.3m、南北は残存部分で1.2mである。確認面からの深さは最深部で14cm、底面は平坦である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。この砂質分は火山灰に由来する可能性があるため、サンプリングを実施した。次年度に分析を予定している。

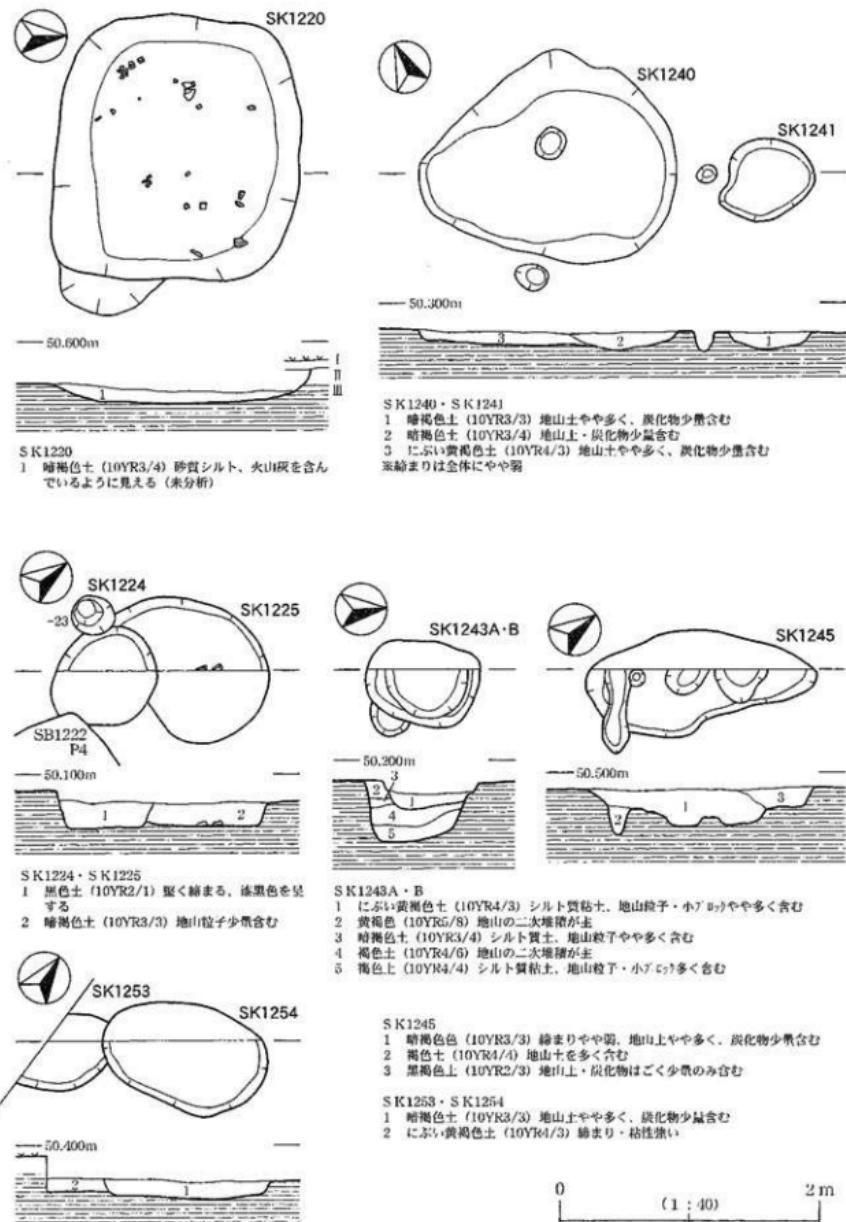
遺物は底面近くから、土師器がまとめて出土した。倒立状態の环状陶片を含め、意図的に置かれたものは少なくとも10個体（9～14）を数える。甕も少量出土している。また須恵器長頸口縁部破片も1点（15）見つかっている。

S K1245 (第12図)

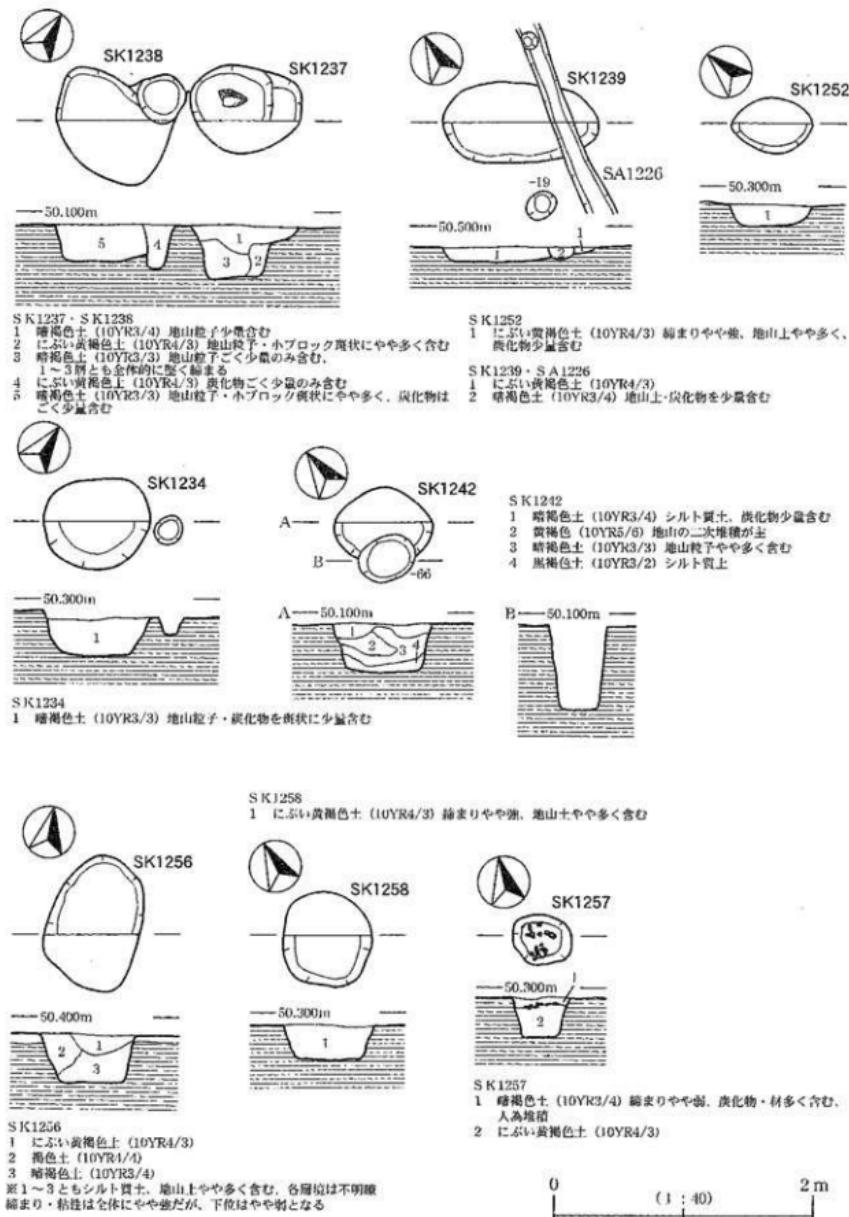
調査区中央南部、I O 59で検出した。規模は長さ180cm×幅84cmであり、盃な楕円形を示す。確認面からの深さは15～30cmであり、底面・壁面ともに凹凸が著しい。堆積土は大きく3層に分けられる。土坑の形態と堆積土の状況から、他の土坑とは性格の異なる土取り穴のようなものではなかつたか。遺物は出土しなかった。

S K1252 (第13図)

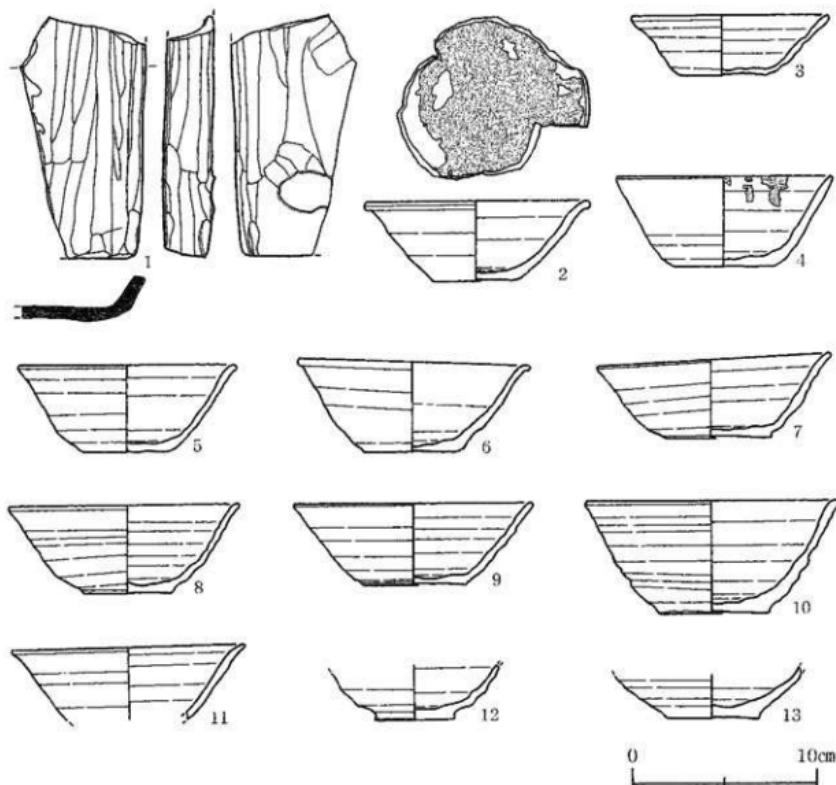
調査区北部中央、J B 59で検出した。規模は長さ64cm×幅43cmであり、楕円形を呈する。確認面からの深さは17cmであり、壁はほぼ平坦な底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。



第12図 古代の土坑 (1)

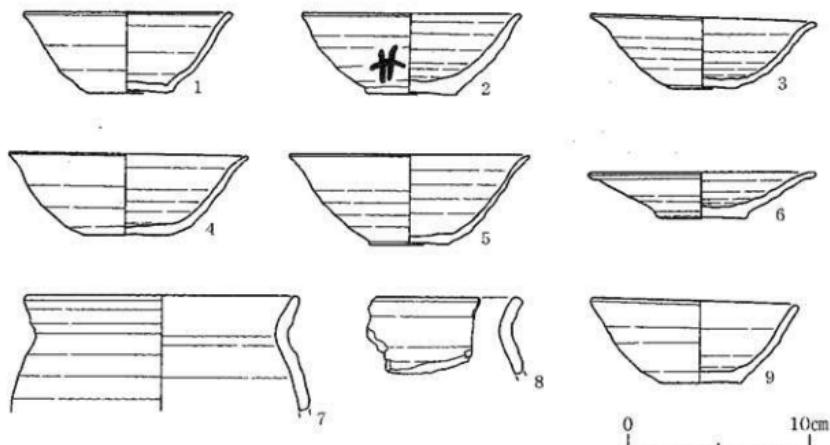


第13図 古代の土坑（2）



番号	種別	器形	特徴		口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 角度	高径 比	外輪 取扱
			内	外						
1	深煎器	複字税: 長さ(13.2), 幅(6.8), 高さ2.4cm								
2	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り、内面全体に漆付済、底容積少	11.8	4.6	4.4	0.39	37.3	36°		
3	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	10.8	4.6	3.3	0.44	30.6	37°		
4	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り、内面口縁部に漆付済、蓋無	11.6	5.8	4.9	0.5	42.2	25°		
5	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	11.7	5.2	4.75	0.44	40.6	29.5°		
6	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.3	6.0	5.2	0.41	42.3	28°		
7	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り、被熱	12.5	5.8	4.6	0.36	36.8	35°		
8	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.6	4.7	4.5	0.37	38.9	33°		
9	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	13.0	5.6	4.6	0.43	34.6	36°		
10	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	13.5	6.1	6.2	0.45	45.9	27.6°		
11	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.6		(3.0)					
12	土師器	坪 内外: ロクロ調理			4.4	(3.0)				
13	土師器	坪 内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り、内面半周に調理			5.0	(2.4)				

第14図 SK 1220出土遺物



番号	種類	器用	特徴	寸法					
				口径 (mm)	底径 (mm)	基高 (mm)	底径 指標	高径 指標	外輪 底
1	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	11.2	4.2	4.65	0.38	49.7	29°
2	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り、底部に割れ、並熱	12.0	5.1	4.5	0.42	37.5	33°
3	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.3	3.9	4.1	0.32	33.3	37°
4	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.9	4.5	4.5	0.35	34.5	30.5
5	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	13.1	4.4	5.0	0.34	38.3	36.5
6	土師器	皿	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	12.5	4.9	2.5	0.39	20.0	59°
7	土師器	甕	内外: ロクロ調理	14.7		(6.3)			
8	土師器	甕	内外: ロクロ調理、底熱						
9	土師器	环	内外: ロクロ調理、底: 回転糸切り	11.2	4.3	4.7	0.38	42.0	29°

第15図 SK 1221・1257出土遺物

SK 1253（第12図）

調査区北西端部、JA 64で検出した。SK 1254と重複し、これに切られる。また西半分は調査区外になるため、規模・形状は明確ではない。調査し得た範囲での規模は、南北方向の長さ62cm、直交する東西方向は50cm程度である。確認面からの深さは僅かに10cmである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

SK 1254（第12図）

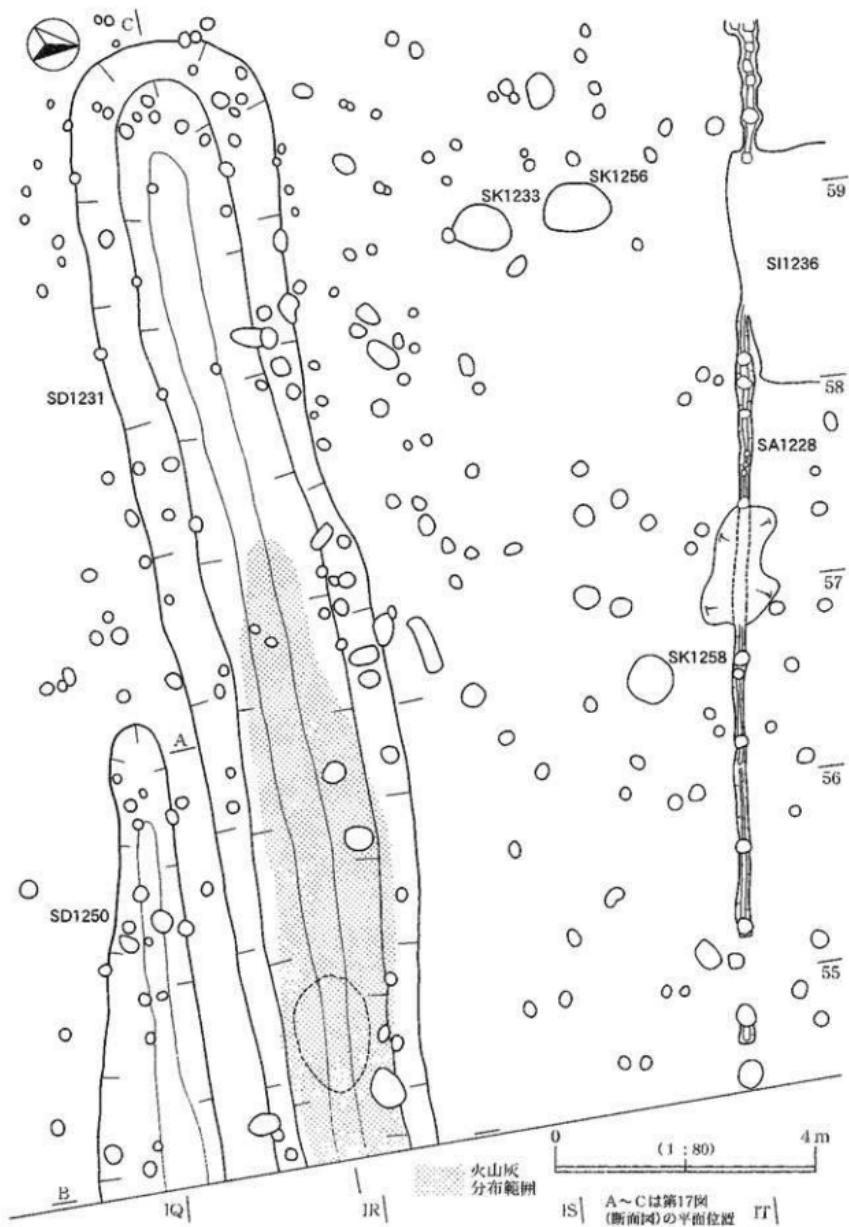
調査区北西端部、JA 63・64で検出した。SK 1253の東端を一部破壊するようにして構築され、その規模は長さ128cm×幅80cmの整った楕円形を呈している。確認面からの深さは14cmであり、壁は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は1層のみである。遺物は出土しなかった。

SK 1256（第13図）

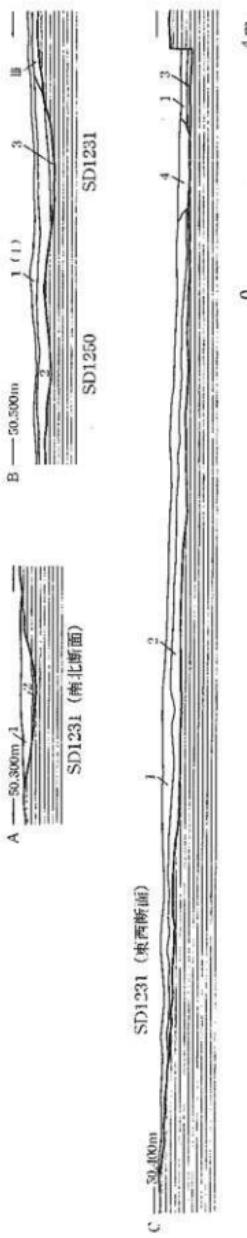
調査区中央北部、IS 59で検出した。規模は長さ106cm×幅72cmであり、楕円形を示す。遺構確認面（地山面直上の第Ⅲ層）からの深さは38cmであり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられる。遺物は出土しなかった。

SK 1257（第13図、第15図9、図版16）

調査区北東部、IT 57で検出した。SK 1221と同様に第Ⅱ層下面において、遺物（土師器）と炭化物がややまとまって出土する箇所があり、精査した結果、同所下位より長さ46cm×幅40cmの小土坑が



第16図 調査区東部中央遺構配置図



第17図 SD1231・1250土層断面図

確認された。確認面（最初に遺物が見つかったレベル、これは図示していない）からの深さは40cmとなる。堆積土は2層に分けられ、遺物が出土したのは1層目のみである。出土した土師器は全て壊類であり、6個体を確認している。図示できたのは、ほぼ完形に復元された9のみである。9は赤褐色の色調を呈し、焼成時の歪みが著しい個体である。

S K1258（第13図）

調査区北東部、I S 56で検出した。規模は長さ74cm×幅68cmであり、円ないしは隅丸方形を呈する。確認面からの深さは26cmを測り、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

④板塀跡

検出した板塀跡は5列であるが、確認位置から次の3つに分けて記述する。

S A1226・1227・1247（付図、第5図）

調査区中央からやや西寄りで南北方向に延びる3列の溝状の造構を確認した。これには溝底面に方形（一部円形）の掘り込みが不規則ながら認められることから板塀跡と判断した。S A1226・1227は、その北端が調査区外に及ぶ。3列とも重複はないものの、0.5~1.6m程の間隔を保って配置されており、あたかも東のS D1231・1250溝跡と西のS B1219・S B1222掘立柱建物跡を遮断するかのような位置関係にある。溝の幅は概ね20cm前後、深さは10~25cm。S A1226・1227は確認した延長が27~28m程になる。S A1226・1227は、それぞれが途中で長さ3.1mと3.2mにわたり途切れることから、ここに出入口施設の存在が想定される。

S A1228（付図、第5・16図）

調査区中央から北寄りを東西方向に延びる板塀跡である。溝底面の形状は前述のS A1226等と同様である。その東端は調査区外に及び、重複するS A1226・1227、S I 1236にそれぞれ切られる。確認した長さは21.3mとなる。幅は概ね20cm前後、深さは8~15cmとなる。この溝も東端で長さ1mにわたり途切れるようである。

S A1248（付図）

調査区中央から南寄りを東西方向に延びる板塀跡である。造構の東端は調査区外に及び、図示した長さは13mであるが、プラン確認段階では西端はS A1226近く、I O 60付近まで

確認している。従って少なくとも18mは延びていたはずである。溝底面にはS A1226等ほど顕著・密ではないが、円形・長円形状の掘り込みが見られる。溝の幅は20cm前後、深さは10cm前後で、ここでも溝が長さ2.5mにわたり途切れる。S A1226・1227と同類の性格をもつ板塀跡であったと考えることができる。

⑤溝跡

S D1231・1250（第16～19図、図版19）

調査区の中央から東側にかけて東西方向に延びる幅広で浅い溝跡2条を検出した。確認位置・形状から道路跡ではないかと想定していたが今後の検討が必要である。2条とも東側は、調査区外に及んでおり全容は明らかではないが、S D1231は、確認した長さ17.5m、幅3m前後、深さは0.2m程、また南側のS D1250は、確認した長さ7.2m、幅1～2m、深さはわずか0.1mにすぎない。両遺構とも横断面は緩い丸底状を呈し、底面（地山面）は特に堅く締まっているとは言えない。

S D1231の堆積土は、1～4層に分けられる。底面直上の3・4層、特に東寄りでは十和田a火山灰が広く薄く（厚さ2～3cm、第16図網点部分）分布している。4層のあり方は断面を観察する限りでは、1・3層を切るような堆積を示していることから、S D1231が1層土で埋没後に、ここを土坑状（東西の長さ約1.6m、第16図点線部分）に掘り返し、後述の土器・炭化物等と一緒に3層土で埋め戻した結果とも考えることができる。ただ平面的には土坑状のプランは確認できず、別の遺構として把握することはできなかった。

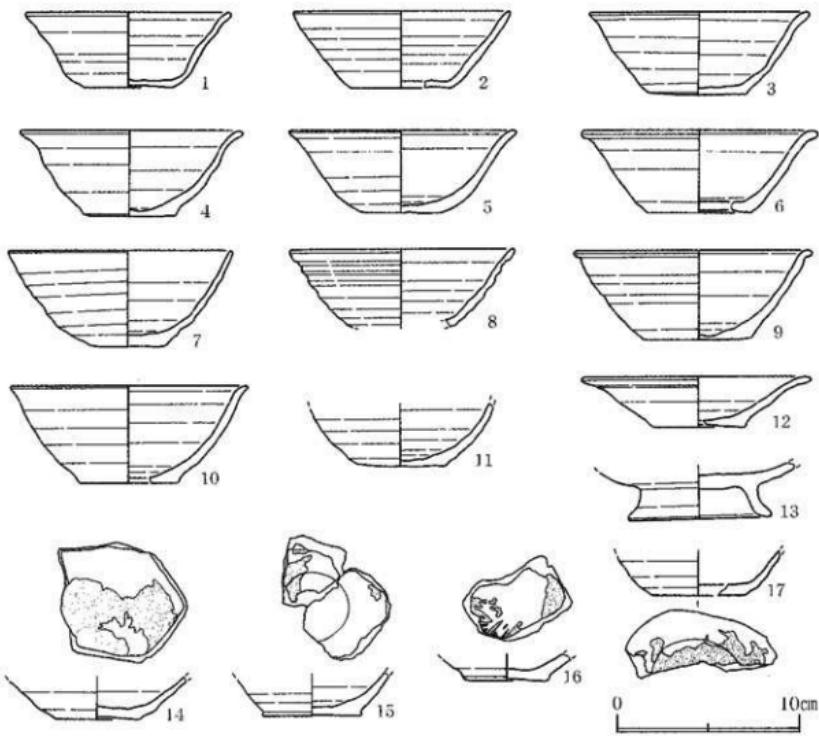
遺物はS D1231から出土している（第18・19図）。特に東側の4層（第16図点線部分）から多く見つかっている。種別では土師器・須恵器・鉄製品・石器がある。

土師器は壺類と甕があり、前者が圧倒的に多い。壺は少なくとも70個体（1～22）あり、12は皿状を示す。このなかには、内面が黒色処理されたもの3個体（いずれも台付、20～22）、灯明皿（13～16）4個体、漆容器（18・19）2個体が含まれる。13は台部内面の4箇所に油煙が認められ、口縁部を打ち欠き後に倒立させて使用していたものと見ることができる。また17は灯明皿と同様の付着物が体外面～底部にかけて見られるものの、残存する内面では観察できず、灯明皿としての使用があつたのかについては不明である。甕は30数点あり、ロクロ成形の長胴形のもの（23～25）と体部下半に縦方向のケズリをもつ非ロクロ成形のもの（25）がある。ロクロ使用の甕の口縁部はいずれも受口状を呈する。

須恵器は壺1個体（27）と甕の小破片が5点（個体）のみ（28～31）である。鉄製品ではS I 1229と同様に棒状を呈する製品を1点確認している。石器では石鏃が1点ある。

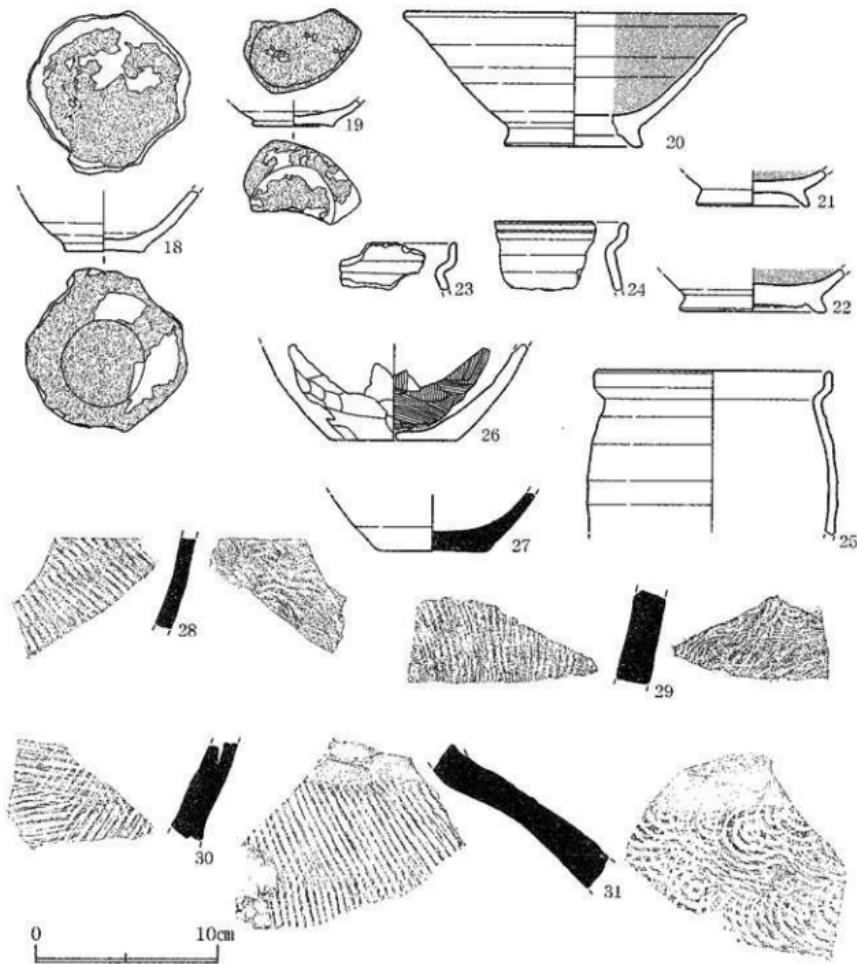
S D1249・1251（付図）

S D1249・1251は、調査区中央から南東寄りにあるS A1248板塀跡から枝分かれするように南北にそれぞれ延びる溝である。S D1249は、確認した長さは約3mである。幅は20cm前後であり、深さは6～8cm、底面に明確な方形・円形の掘り込みは観察できなかった。またS D1251は、その長さは2.2m程である。幅は15～20cm、深さはわずか5cm前後にすぎない。溝の両端近くには円形の掘り込み（柱穴）が見られる。



番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	底高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外縁 度
1	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	11.0	4.5	4.2	0.41	78.2	33°
2	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	11.6	5.3	4.2	0.46	36.2	33°
3	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	11.8	5.4	4.55	0.46	38.6	33°
4	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	11.8	5.0	4.7	0.42	39.8	33°
5	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.0	4.5	4.5	0.38	37.5	35.5°
6	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.2	5.5	4.5	0.46	36.9	35°
7	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.2	5.1	5.3	0.34	43.4	31°
8	土師器	坪	内外：ロクロ調整	12.2				(4.3)	
9	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.6	5.5	4.9	0.46	38.9	31.5°
10	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.8	5.3	5.3	0.41	41.4	31°
11	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り	12.8	5.0	5.3	0.38	38.5	31°
12	土師器	組	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、被熱	12.1	6.0	2.75	0.41	22.7	54°
13	土師器	台付坪	内外：ロクイ調整、底：四輪系切り、被熱、台盤内面に油焼、打明頭に転用	6.4	(2.9)				
14	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、内面に油焼付苔、打明頭に転用	4.6	(2.4)				
15	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、内面に油焼付苔、有明頭に転用	5.1	(2.35)				
16	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、内面に油焼付苔、打明頭に転用	4.8	(1.5)				
17	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、外頭に油焼付苔、打明頭に転用	5.0	(2.5)				
18	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、内面に漆付苔、漆青附か	4.5	3.2				
19	土師器	坪	内外：ロクロ調整、底：四輪系切り、内面に漆付苔、漆青附か	4.5	(3.2)				
20	土師器	台付坪	外：ロクロ調整、内：ロクロ—ミガキ—黑色燒理、底：四輪系切り	18.2	7.1	7.3	0.39	40.1	38°
21	土師器	台付坪	外：ロクロ調整、内：ロクロ—ミガキ—黑色燒理、底：四輪系切り	5.6	(2.0)				

第18図 SD1231出土遺物（1）



番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (mm)	底厚 (mm)	高径 指数	外傾 度
22	土師器	台付杯	外:ロクロ輪型、内:ロクロ→2ガキ・墨色施塗、底:四軒赤切り	7.4	7.4	(2.4)			
23	土師器	甌	内外:ロクロ測壁						
24	土師器	甌	内外:ロクロ測壁						
25	土師器	甌	内外:ロクロ測壁	12.6	10.8	(8.8)			
26	土師器	甌	外:ヘラケズリ、内:ヘラナデ(非ロクロ)			6.8	(5.3)		
27	須恵器	片	内:ロクロ縞模、底:四軒赤切り			6.3	(3.2)		
28	須恵器	甌	外:平行叩き、内:青面波当て目						
29	須恵器	甌	外:平行叩き、内:青面波当て目一ナギ						
30	須恵器	甌	外:平行叩き、内:平行当て目						
31	須恵器	甌	外:平行叩き、内:青面波当て目						

第19図 S D1231出土遺物（2）

(2) 繩文時代

縄文時代に構築された遺構は、土坑5基、焼土遺構2基である。出土遺物から見た時期は、前期中葉～後葉・末、中期初頭に比定されるが、小破片のため不明確なものも含まれる。また調査区南縁では精査の結果、基盤層である硬質泥岩が累々と確認された。この中には、該期と明確に判断される遺構は検出できなかったものの、岩の欠落箇所と石器・石核や縄文土器の分布（付図点線内）から石器石材を採掘した場所であった可能性がある。この区域を「硬質泥岩分布域」と仮称して本項で紹介する。

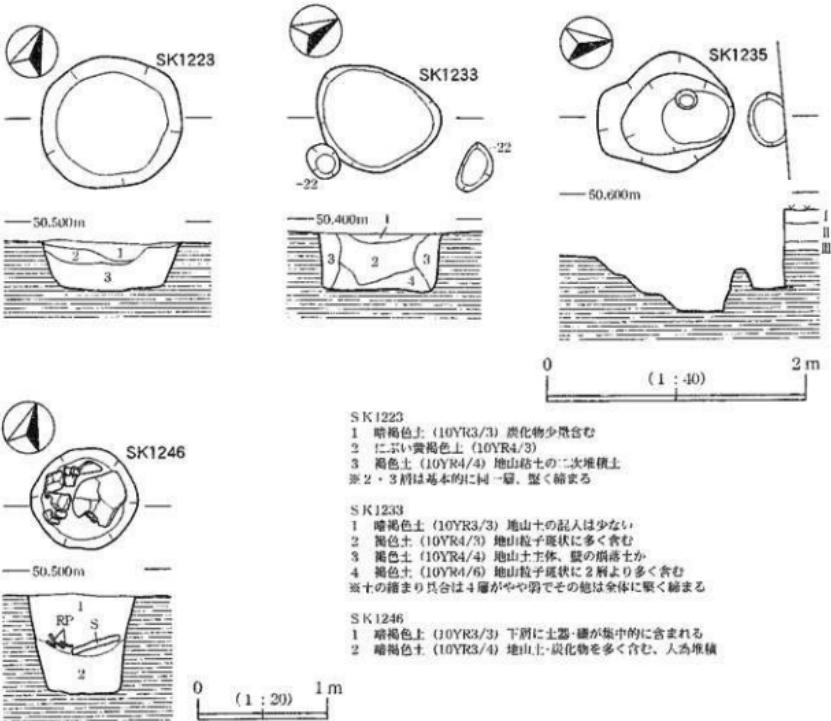
①土坑

SK1223（第20図、図版17）

調査区中央北西部、I S 61で検出した。規模は長さ108cm×幅102cmであり、円形を呈する。確認面からの深さは40cmであり、壁は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、2・3層は、土性・混入物から人為堆積と考えられる。遺物は出土しなかったが、本土坑は形態・堆積土の状況から縄文時代の土壙墓であったと判断される。

SK1225（第12図）

調査区北西端部、J B 62で検出した。SK1224と重複し、これに西側を切られ、規模は不明瞭ながら長さ140cm前後、幅102cmの楕円形を呈するようである。確認面からの深さは最深部で20cmであり、



第20図 縄文時代の土坑

平坦な底面上には拳大の礫が2点確認された。堆積土は1層であり、確認面上から縄文土器が3点出土している。土器は前期後葉～末の大木6式に併行する。

S K1233 (第20図、図版18)

調査区中央北部、I S 59で検出した。土坑の南側で径25cm程の柱穴（深さ22cm）により一部を切られるものの、規模は長さ100cm×幅82cmであり、略円形を呈する。確認面からの深さは45cmであり、周壁は底部からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に分けられ、土性・混入物から基本的には人為堆積と判断される。遺物は2～4層中に小破片ではあるが、縄文土器が3点（2個体）、剝片1点出土している。形態並びに堆積土の状況から土壌墓ではないかと推定できる。土器は小破片で摩耗していることから、時期は不明である。

S K1235 (第20図)

調査区北部、J B 57で検出した。規模は長さ104cm×幅82cmであり、やや歪な椭円形を呈する。確認面からの深さは最深部で44cmを測り、北側ほど深さを増している。遺物は縄文土器の細片が10点程出土しているが、いずれも同一個体の可能性がある。

S K1246 (第20図、図版17)

調査区中央南部、I N 59で検出した。S T 1229に隣接するものの重複はない。規模は径40cmの円形を呈する小土坑である。確認面からの深さは38cmである。堆積土は2層に分けられ、その中位（1層下部）よりまとまって遺物・礫・炭化物が出土した。

遺物はいずれも縄文土器であり、小片ではあるが40数点確認できた。礫は長さ・幅20cm、厚さ3cm程の扁平な形状を示す。土器は深鉢と小型鉢の2個体存在していた可能性が高く、分割した土器と礫と共に埋納した施設であったと考えられる。土器から見た時期は、胎土に少量の纖維を含むことから前期でも前述のS K1225土坑よりは遡る前期中葉頃の可能性がある。

②焼土遺構

S N1259・1260 (第5図)

S B 1219割立柱建物内には2基の焼土が位置する。S N1259は長さ52cm、幅20～32cm、S N1260は長さ38cm、幅26cmの規模であり、それぞれ歪な長円形を示す。両者とも地山が赤化しており、この場での火の使用は明確である。

③硬質泥岩分布域 (付図・第21図、図版18・21～22)

調査区南縁部で基盤層の硬質泥岩が夥しい数確認された。調査前は僅かに露出する（図版21上）にすぎなかつたが、精査によりこれだけの岩が姿を現すとは予想もしていなかった。岩は基本的には東が下がり、西が上がる岩脈の地質構造を示す状態で検出されたが、明らかに人力で移動されたもの、加工痕の残るものなどが散見される。図版18下は明瞭な剥離痕が残る石核である。これは調査区南西隅部で確認しており、その長さは50cmを超す。なおこの近くで見つかった岩は、長さ3.7m、幅2.4mの平面が長方形を呈する巨岩であり、今回の調査では最も規模の大きいものである。

また同域の中央東部では岩の分布が極端に疎らな箇所が存在する。その南側は調査区外に及ぶため全体像は不明であるが、東西6.3m、確認できた南北3.5mの半円状の規模となる（付図・第21図点線部分）。この範囲内では縄文時代の土器（前期後葉・末の大木6式主体か）・石器が比較的多く出土しており、古代の遺物は殆ど認められない。

調査状況と遺物のあり方から推測すれば、同箇所は縄文時代において、石器石材を掘り出した場とも見ることができるかもしれない。先の大型の石核も該期の仕事として捉えることができよう。

(3) 時期不明

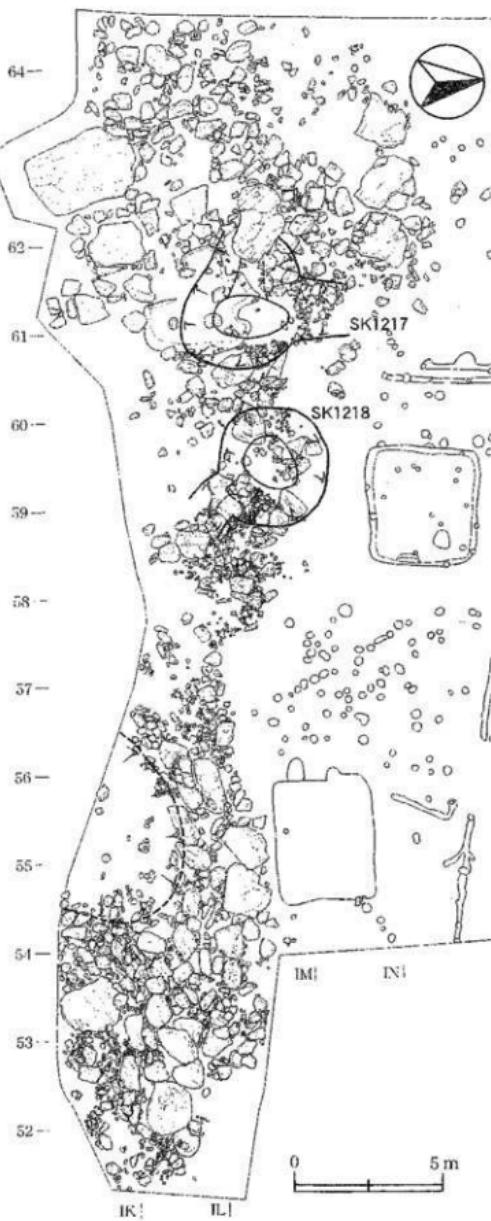
時期の特定されない遺構は、前述の硬質泥岩分布域内に存在する上坑2基である。これは調査前の段階で既に擂鉢状の窪地として認められており（付図朱線部、図版20上）、確認位置とその形状から当初「石墨石材採掘坑」ではないかと推定していた箇所である。

SK1217・1218

（付図、第21図、図版20）

調査区南縁部の中央西側で2基が並ぶ形で検出された。精査の結果、規模は2基とも径4m前後の略円形を示し、確認面から底面までの深さはSK1217で80cm、SK1218で70cm程度であった。堆積土は、厚さ10cm前後の表上下が地山・基盤層となる。従って火山灰等の堆積も認められない。また遺物はSK1217表土にて寛永通寶1枚を採集している以外は、縄文・古代を含め一切出土していない。

以上のことから2基の土坑は、硬質泥岩分布域において、岩の掘り出し（あるいは切り出し）により形成された跡である可能性は高い。しかしながらその構築時期は特定できないことから、当初想定していた古代の石墨石材採掘坑であると明言できない。またこれが周辺の状況から縄文時代の石器石材採掘に係る遺構、あるいは中世以降における作為の可能性も考えられる。

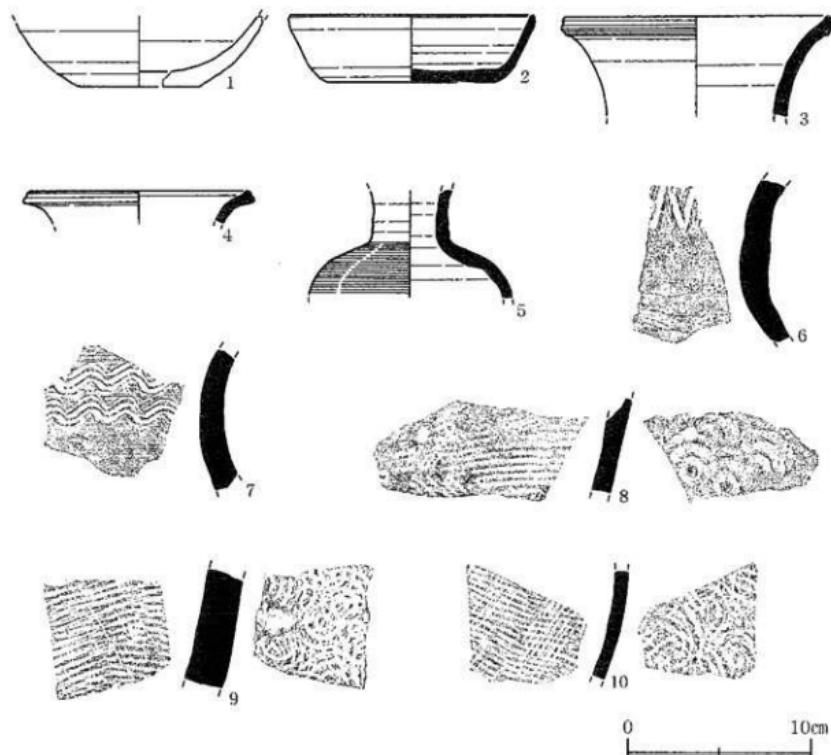


第21図 調査区南縁部で検出の硬質泥岩

3 遺構外出土遺物（第22図）

第115次調査区には明瞭な遺物包含層がなく、従って遺構外出土の遺物も僅少であった。ただ古代以前の遺物は、前項で言及した硬質泥岩分布域における縄文土器（前期～中期）・石器があり、量としては古代の遺物を凌駕するものである。ただここでは古代の遺物のみを紹介しておく。

古代の遺物は少ないながらも、その大部分は硬質泥岩分布域から出土している。器種では、土師器壺・甕、須恵器壺・壺・甕がある。土師器では壺（1）を図示する。二次的な被熱が見られる。須恵器では底部に回転ヘラ切り痕を留める壺（2）、3～5は広口あるいは長頸壺の破片である。また甕では、



番号	種別	断面	出土位置・層位	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底盤 形状	高径 比	外傾 度
1	土師器	壺	TM69-II	内外：ロクロ調壁、底：回転ヘラ切り、被熱	-	6.6	(4.0)			
2	須恵器	壺	TM63-II下	内外：ロクロ調壁、底：回転ヘラ切り	13.2	9.2	3.7	69.7	28.0	19°
3	須恵器	甕	古探	内外：ロクロ調壁	14.4	-	(4.5)			
4	須恵器	甕	IC64-II	内外：ロクロ調壁	12.0	-	(1.8)			
5	須恵器	長颈甕	IQ63-II	内外：ロクロ調壁、外側底盤状のロクロ調底						
6	須恵器	甕	古探	外：ロクロ一波状底盤、内：ロクロ調壁						
7	須恵器	甕	古探	外：ロクロ一3条1組の波状底盤2段底盤、内：ロクロ調壁						
8	土師器	甕	IK51-II	外：平行叩き、内：凸面底當て具、範用底か						
9	土師器	甕	古探	外：平行叩き、内：凸面底當て具						
10	須恵器	甕	古探	外：平行叩き、内：凸面底當て具						

第22図 遺構外出土遺物

口縁部に波状文をもつ大型のもの（6・7）、内面が摩耗し、少量の墨が付着していることから転用硯の可能性のあるもの（8）が見られる。

第3節 小結

第115次調査において、次の点が明らかとなり、同時に検討課題が生じたことになる。古代では、①政庁西方の平坦域にも古代の遺構群が明確に広がることを確認した。これは政庁東方の平坦域（第90・95・100・105次調査区）における検出遺構である掘立柱建物跡・板塀跡・竪穴住居跡・土坑等と同様の遺構が、西方域でも確認されたことである。

②遺構の配備を見ると、南北に軸線をもつ遺構群（S B 1219・1222掘立柱建物と S A 1226・1227・1247板塀跡）と東西に軸線をもつ遺構群（S A 1228・1248板塀跡、S D 1231・1259溝跡）が存在する。両群の関係は、板塀跡では、東西の S A 1228は、南北の S A 1226・1227に切られていることが明確ではあるが、各群内での遺構変遷及び調査区の両端に位置する竪穴住居跡との関係については、今後の検討が必要である。

③S I 1229・1236竪穴住居跡はカマドをもたず、浅い掘り込みを伴う炉を伴うことから何らかの工房跡であった可能性がある。しかし埋土の築掛けや磁着の結果では、これを鍛冶関係の炉と断定することはできなかった。

④S D 1231溝跡は、調査時には道路跡ではないかと想定していたが、古代城柵においてこのような形態の道路が存在し得るのか、検証が必要である。ただ現況の地形図を見る限りでは、S D 1231の東に連なるように溝状の落ち込みが政庁前殿方向に延びていた可能性はある。これは第3図に点線による推定線を加筆しており、参照されたい。

⑤遺構内出土の遺物は、土器器坏類の形態・法量及び火山灰との関係から10世紀前葉を前後する時期に比定される。従って明確に創建期あるいはそれに近い時期の遺構は確認されなかつたことになる。一方の縄文時代では、

⑥縄文時代（前期～中期）において、長森西側の丘陵平坦部に該期の遺構が広がることが確認された。⑦払田柵跡で、縄文時代の遺構・遺物がまとまりをもって見つかったのは、初めてである。

⑧検出遺構は、土坑と焼土遺構のみであったが、土坑のうちのいくつかは土壙墓であったと考えられ、焼土遺構と柱穴状ピットの存在から、今後竪穴住居跡が発見される可能性がある。

⑨長森丘陵南縁部では基盤層である硬質泥岩が表層近くに存在し、岩の欠落箇所や石核等の存在等から、少なくとも縄文時代には石器石材の採掘を行っている可能性が出てきた。

さらに時期不明では、

⑩調査前の段階で既に擂鉢状の窪地として認められていた土坑は、精査の結果、その構築時期は特定できなかった。しかしある時期に石材を採掘した（しようとした）跡である可能性は高い。調査区外に点在する同種の窪地の調査及び中世以降の視点に立った場合には、聞き取り調査等を加えて検討していく必要が生じたことになる。



第115次全景（西方上空より）

杉林の中が調査区（平成11年9月2日撮影）



調査区遠景（南東→）杉林の中

中央が基盤された外郭開門（注）と石堤



調査前状況（南東→）杉木伐採、表土除去後

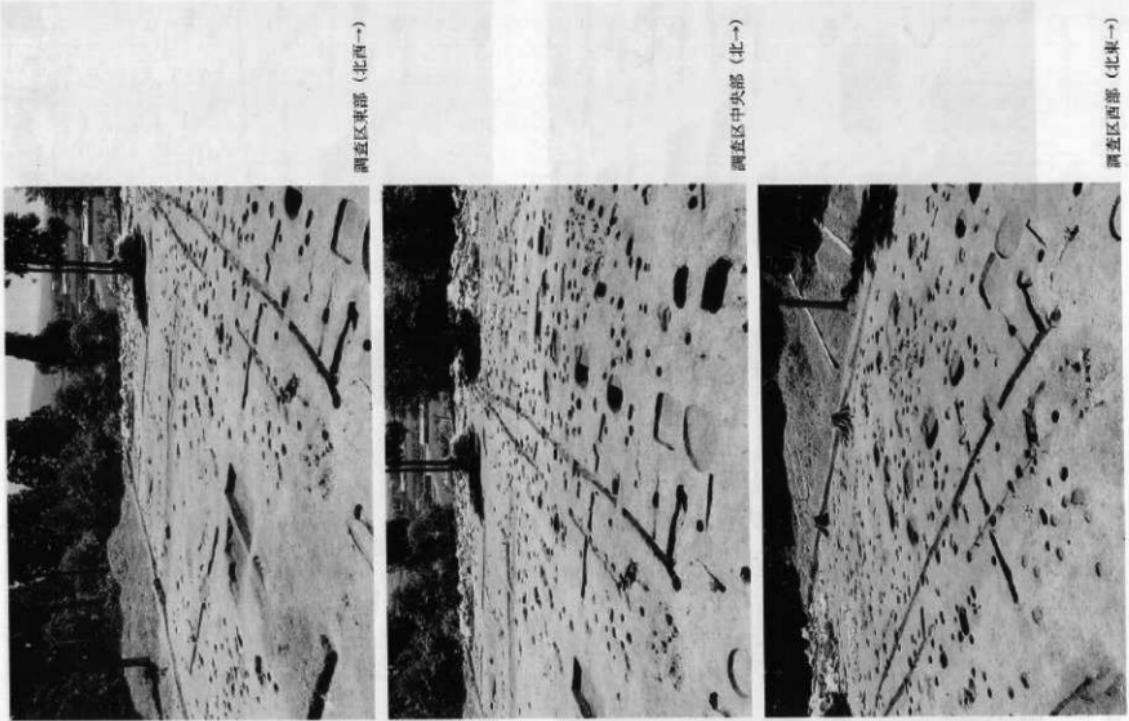


調査区全景（写真上が南）



調査区東部（北→）

图版 4 第115次





S B 1219A・B全景（北→）



S B 1222A・B全景（北→）



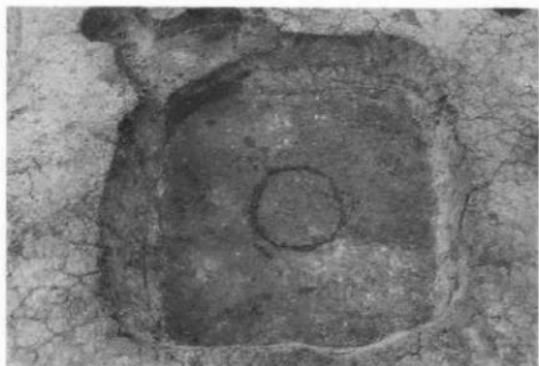
S B1219-P1 (東→)



S B1219-P2 (東→)



S B1219-P3 (東→)



S B 1219-P4 (北→)



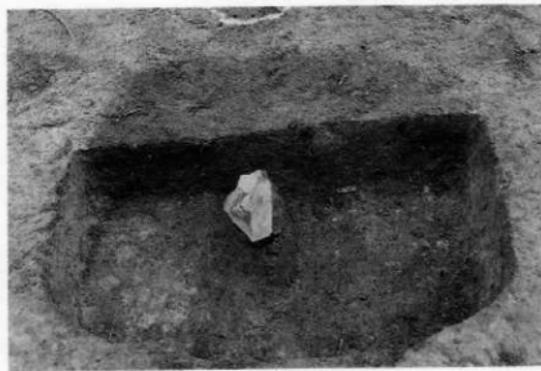
S B 1219-P5 (南→)



S B 1219-P6 (南→)



SB 1219-P 8 (西→)



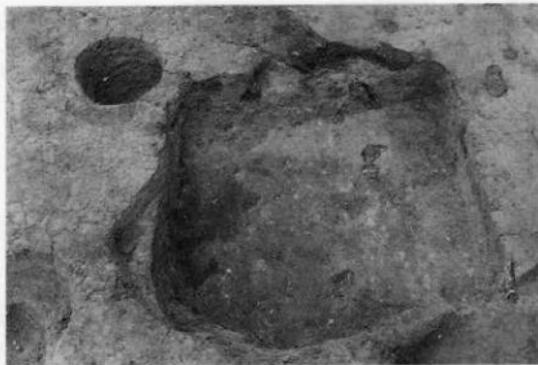
SB 1219-P 10 (西→)



SB 1219-P 11 (西→)



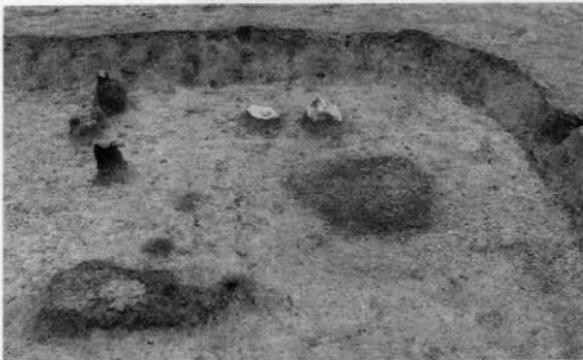
S B1222-P2 (東→)



S B1222-P4 (北→)



S B1222-P5 (西→)



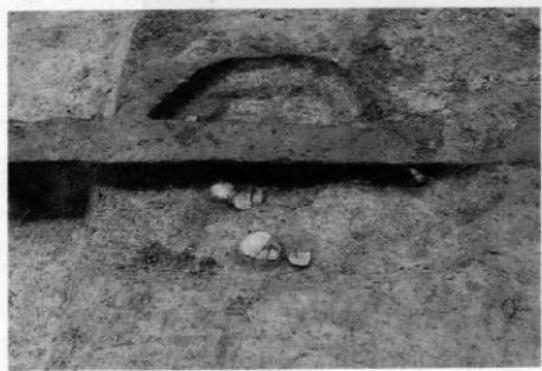
上：S I 1229全景・遺物出土状況（東→）
中：住居北東部の状況（南→）
中央奥に白く見えるのが
人頭大の櫛（右）と須恵器裏破片（下写真）
両者とも床面直上にあり
意図的に置かれたものと思われる
下：須恵器裏破片（実測図は第8図1）
二次的に何らかの工具として使用



S I 1236土層断面
(南側、東→)



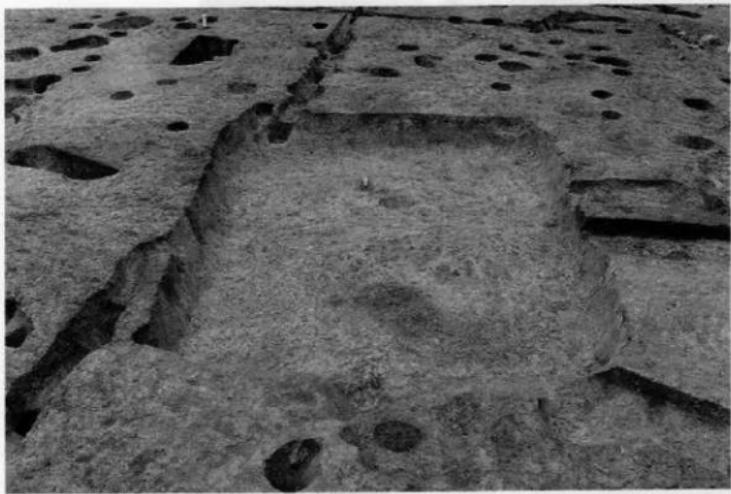
S I 1236・SK 1244
土層断面 (東→)



SK 1244遺物出土状況
(東→)



S I 1236 • SK1244全景 (北→)



S I 1236 • SK1244全景 (東→)



S I 1236遺物出土状況



S K 1221遺物出土状況
(上面)
土器と共に炭化材(物)
が多く見られた



同上（下面）
この直下に浅い土坑が
現れた

図版14 第115次



SK 1220遺物出土状況
(東→)



同上 土師器片出土状況
(上写真の左手前に位置)



同上 風字觀出土状況



S K1237・1238土層断面
(北西→)



S K1237出土状況
(北西→)



S K1239 (東→)
重複する溝は S D1226
奥は S D1227



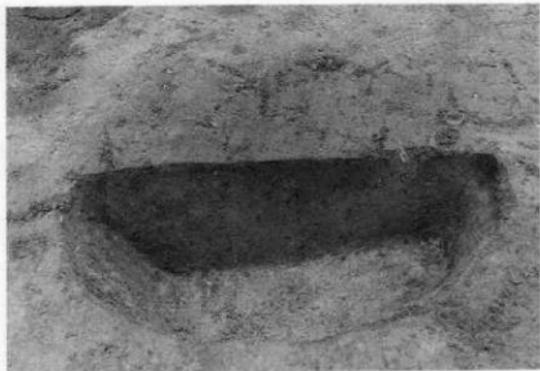
S K 1257 確認状況 (東→)



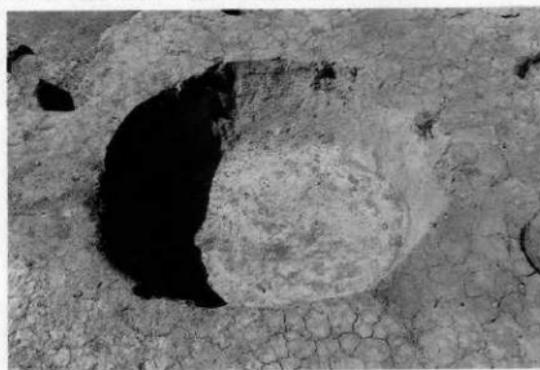
同上 土壠断面 (北→)



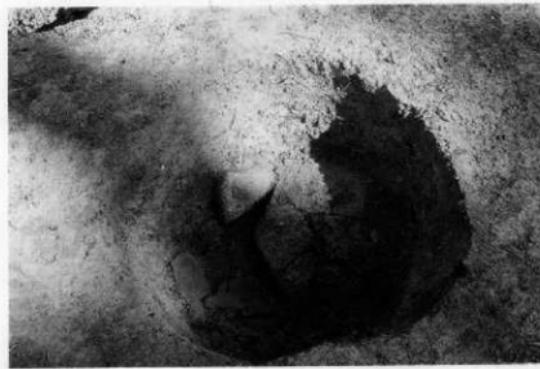
調査風景 (南西→)
調査区北東部の精査状況



S K 1223土層斷面 (南→)



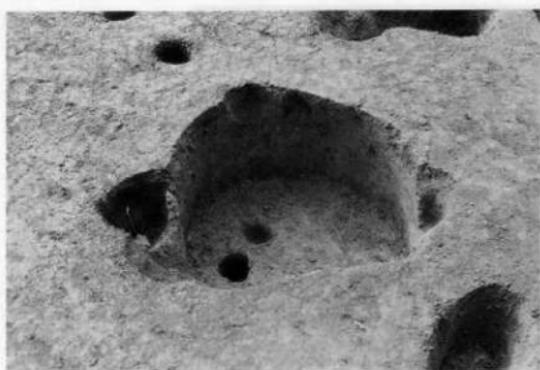
同上 完掘 (南→)



S K 1246遺物・礫出土狀況
(南→)



SK1233土層断面（東→）



同上 完掘（東→）



硬質泥岩分布域内に残る
大型の石核
調査区南西部で確認
長さ50cm超
1人で抱えるのは大変である



S D 1231土層断面
(南東→)



同上 遺物出土状況
(東側、南東→)



同上 I Q54における
遺物出土状況
右側の白く見えるのが
火山灰



時期不明の土坑（東→）
縁認状況、縁は殆ど露出
していなかったが
手前の人のいる所が
SK1218
奥がSK1217



同上 摂り下げる途中（東→）
次第に縁が頭を出し始め
ている



同上 完掘（北東→）
長さが1mを越すような
礫がコロコロしている
中央の人のいる所が
SK1218



調査区南東隅部の調査前状況（南→）
ここでも礫は僅かしか確認できなかつた



同上 挖り下げ後、上とほぼ同一地点から撮影
長さが2mを超す礫も見つかった



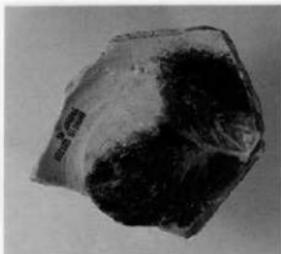
上：調査区南縁部の硬質泥岩分布域
(写真上が南)

中：同上 南東部

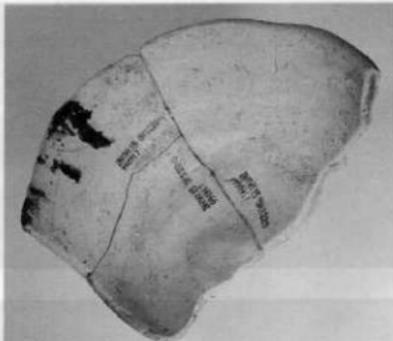
調査箇所では繩が欠落（中写
真の右上部分）、周辺から繩

文土器が出土、縄文時代に石
器の素材となる石材を採掘し
た場かもしれない

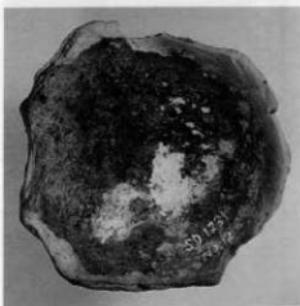




灯明壺に転用された土師器壊
SD1231出土、第19図14



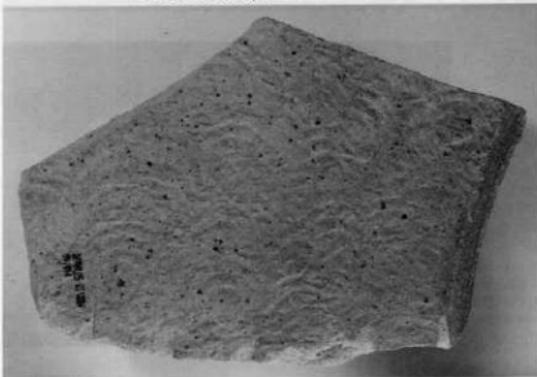
口縁部内面に漆が付着している土師器壊
SK1220出土、第14図4



漆容器に転用された土師器壊
SD1231出土、第20図18



漆容器に転用された土師器壊
SK1220出土、第14図2



須恵器大甌破片
SI1229出土、第8図1
何らかの工具に転用

第4章 第116次調査の概要

第1節 調査経過

第116次は、外郭西門東部地域における遺構分布を確認する調査である。本調査は、第115次調査に並行する形で進めており、以下にその経過を調査日誌の記述から抜粋して紹介する。

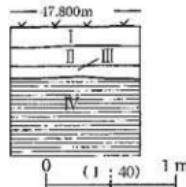
調査開始日は粗掘りを始めた8月26日であるが、草刈り等の下準備は以前から断続的に行っていた。27日、早くも土師器・繩文土器・剥片等出土する。その量は多くはない。9月20日、初めて遺構が検出される。土坑であろうか。22日、調査区西側（長森西端部）で土坑がやや集中して見つかる。しかし遺物は少ない。29日で粗掘りはほぼ完了する。引き続き遺構確認のためのジョレンがけを行う。

10月4日、全景写真撮影を実施。5日、プラン確認状況の平面図を平板にて作成する。19日、人力による埋め戻しを行い、野外調査を終了する。

第2節 検出遺構と遺物

1 調査区の立地と基本層序

第116次は外郭西門の東方約30mに位置し、長森丘陵西端部の馬背状の平坦地からやや北側に傾斜する地区にあたる。標高は47~48mである。現況はかつて杉林であったところを数年前に伐採しており、下草や雜木等で藪となっている。



第23図 基本層序

調査区は長さ50m、幅7mのトレンチを東西方向に設定し、掘り下げを行った。調査区の基本層序は、トレンチ南壁ほぼ中央部で観察した。

第Ⅰ層：暗褐色土（10YR3/3）表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は15cm前後。

第Ⅱ層：黒褐色土（10YR2/3）部分的に炭化物を混入する。繩文土器・土師器等を含有するが、包含層と呼べるほどの遺物量はない。層厚15~20cm。

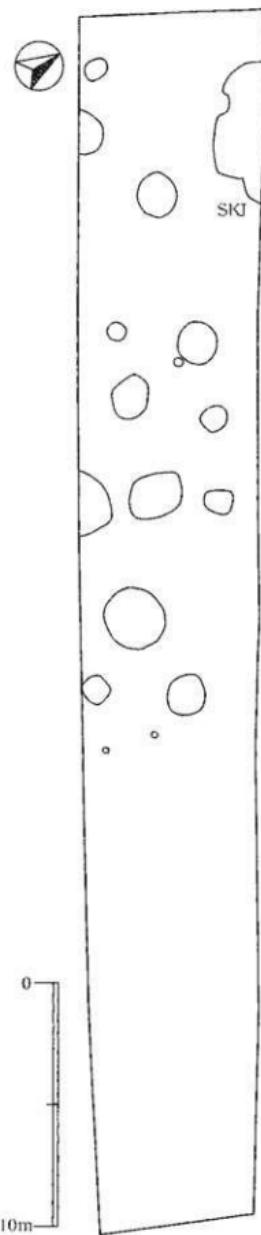
第Ⅲ層：褐色土（10YR4/4）地山漸移層、第Ⅱ層との境は明瞭ではない。遺物は含まない。層厚8~12cm。

第Ⅳ層：黄褐色土（10YR5/6~5/8）地山層、観察地点は単純な粘質土であるが、東部に移行するにつれ、基盤の硬質泥岩が混じる疊混人の粘質土の様相を呈する。

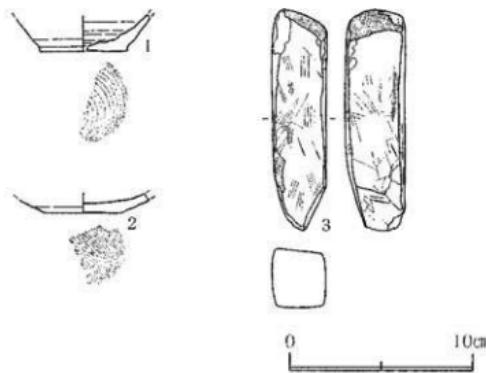
2 遺構と遺物（第24・25図、図版25）

検出した遺構は、第24図に示したように調査区中央から西部にかけて分布しており、竪穴状遺構1基、土坑13基を確認した。今回はプラン確認のみであり、遺構番号は付していない。また確認面上での遺物の出土ではなく、時期は明らかにできなかった。

竪穴状遺構としたものは調査区西端部にあり、大部分が調査区外に及ぶため様相は不明確ではあるが、一辺が5~6mとなり竪穴住居跡の可能性もある。また土坑は長さが1m前後のものから2.5m程の



第24図 遺構配置図



第25図 出土遺物

比較的大型のものも存在する。

遺物は全て遺構外出土であるが、遺構の分布する調査区中央から西部・西端の第Ⅱ層中に散在的に認められる。平安時代では、土師器壺3個作（第25図1・2）、砥石1点（3）、縄文時代では土器片10数点と石器（石匙・剝片）数点がある。量的には縄文期が多く、土器は中期に属すると思われる。3は横断面が方形をなす砥石である。その4面が砥面となる。さらに図示面頭部と左側面下部の2箇所に敲打に伴う潰れ認められる。両痕跡の先後観察から砥石としての機能終了後に叩き石として活用されたものと考えられる。

第3節 小結

第116次では、竪穴状遺構1基、土坑13基を検出した。今回は遺構の確認調査ということでプラン検出のみに留めているが、次年度には周辺の遺構の広がりと帰属時期を確認した段階で一部精査を行う予定を立てている。

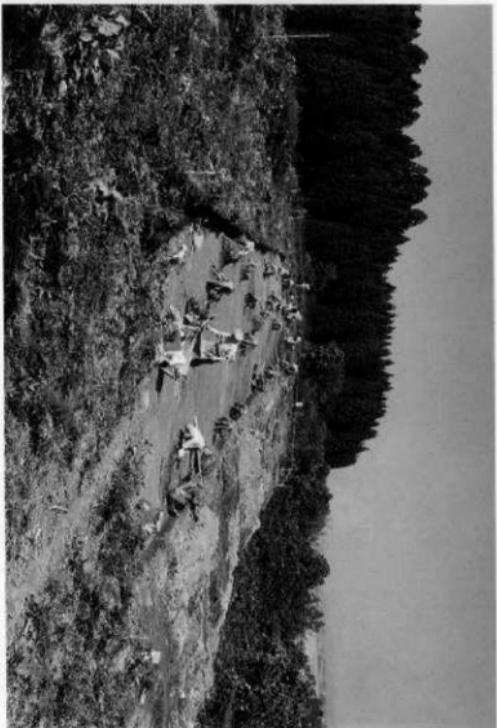


第116次調査区遠景（南西→）

中央の丘陵上が調査区
左側の白く見えるのは環境整備前に砂敷整地した外郭西門



調査区近景（東→）表層の根等除去後に撮影



開拓風景 (東→)



退耕地出状況 (西→)

手前左が略穴状遺構、他は土坑か

第5章 調査成果の普及と関連活動

1 諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門周辺地域などにおいて、秋田市立土崎中学校（5月20日）、横手市朝倉公民館（6月29日）、六郷中学校（6月30日）、秋田大学史学研究室（7月12日）、秋田県議会総務企画委員会（7月13日）、六郷高校1年生生徒・職員（7月15日）、チャレンジ研修マイプラン支援事業講座（7月23日～8月12日）、社会貢献活動研修（教職員10年経過研修、8月18・19日）、山形県川西町文化財保護協会（9月3日）、仁賀保町文化財保護協会（9月10日）、フィールドワークで学ぶふるさと秋田の地理と歴史講座（9月21日）、能代市教育委員会（9月28日）、秋田工業高校建築科1・3年生生徒・職員（10月26日）などの遺跡研修・見学会に対し、払田柵跡の説明を行った。

2 払田柵跡環境整備審議会への出席

平成12年3月23日

3 顧問会議の開催

第49回 平成11年10月13日

第50回 平成12年3月1日

4 報告・講演

高橋 学『払田柵跡および六郷町近郊の遺跡』 県立六郷高等学校ふれあい体験学習

平成11年7月7日 場所：県立六郷高校

高橋 学「払田柵跡－平成11年度調査の概要－」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

平成12年2月19・20日 場所：福島県郡山市 郡山ユラックス熱海 （資料報告）

高橋 学「払田柵跡（第115・116次調査）」『平成11年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

平成12年3月4・5日 場所：大曲市立中央公民館

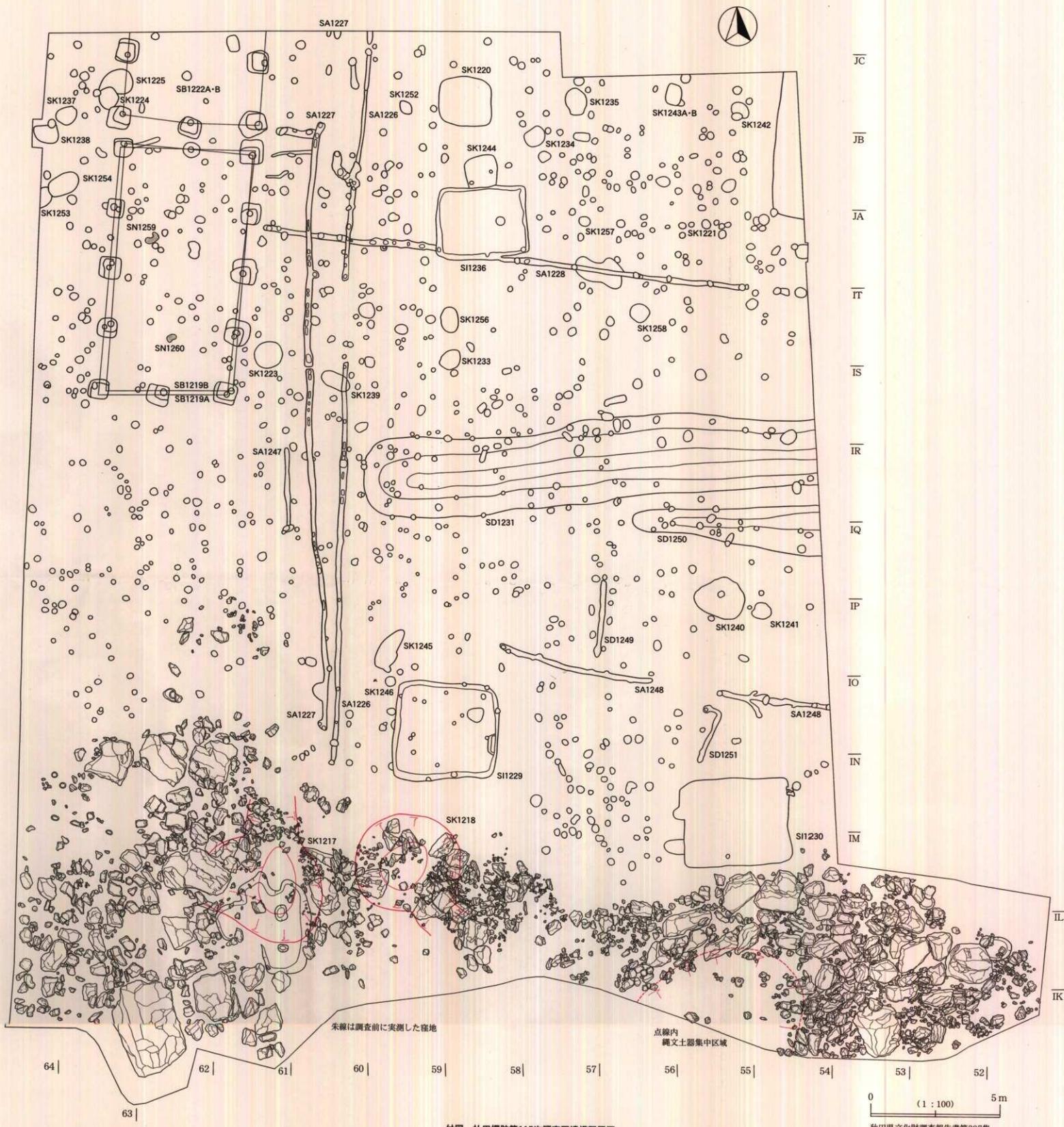
5 資料の貸し出し

秋田県立博物館 新発見考古速報展『発掘された日本列島'99』 平成11年7月25日～8月21日

貸し出し資料：木簡・絵馬・木製鈴・角材など

報告書抄録

ふりがな	弘田櫛跡 第115・116次調査概要						
書名	弘田櫛跡 第115・116次調査概要						
副書名							
卷次							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第307集						
編著者名	高橋 学						
編集機関	秋田県教育庁弘田櫛跡調査事務所						
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地						
発行年月日	2000年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
弘田櫛跡	秋田県仙北郡 仙北町弘田 千畑町本堂城回	53429 53432	39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第115次 19990419 ～ 19991022 第116次 19990826 ～ 19991019	1240 350	学術調査 学術調査
	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
弘田櫛跡 第115次	城 櫻	平安時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 土坑・板塀跡・溝跡	須恵器、土師器 風字硯 鉄製品	縄文期の遺構・遺物 がまとまって発見されたのは弘田櫛跡では初めて。		
		縄文時代	土坑・焼土遺構	縄文土器・石器			
弘田櫛跡 第116次	城 櫻	平安時代 縄文時代	竪穴状遺構・土坑	土師器、砥石 縄文土器・石器			



付図 払田櫛跡第115次調査区遺構配置図

秋田県文化財調査報告書第307集
払田櫛跡調査事務所年報1999
払田櫛跡 第115次・116次調査概要—
2000年3月
秋田県教育庁払田櫛跡調査事務所